

第8章

タンザニアの経済自由化と農村零細企業の形成過程

——メル人社会における乳牛飼養と牛乳家内加工——

はじめに

タンザニア北部高地の定着農耕民は、農業集約化と生計多角化を進めながら人口増加と土地不足に対処してきた。農耕と複合して広く行われている乳牛飼養は、そうした方向性をもった活動の一つとして重要である。メル(Meru)山斜面の農村社会においても、乳牛飼養と牛乳流通の主要な担い手は小農であり、彼らは飼葉、牛乳、乳牛をめぐる零細で「インフォーマル」な取引回路を形成してきた。ここでいう取引回路とは、人々の間に規則性・傾向性をともなって反復している取引の経路のことをさし、これは彼らの農村社会の一側面をなしている。乳牛飼養をめぐる活動の一つとして近年新たに付け加わったのが、一部の小農による牛乳家内加工である。これは、農村経済の停滞を背景としつつ、経済自由化という政治的に決定された経済変動が刺激となって登場してきた農村零細企業活動である。本章の問題関心は、こうした活動の主体が形成されてくる過程、そしてそれが農村社会にとってもつ意義にある。とくに、それが既存の取引回路の延長線上に現れたものなのか、あるいはそれとは断絶したものなのかという点は、この活動が今後どの程度波及し、農村社会の変化を誘発するのかをめぐる手がかりを与えてくれよう。

この問題を検討するために、本章では、まず乳牛飼養をめぐる人々が形づくる各種の取引回路を認定し、それらの特徴づけを行う。認定された取引回路については、とくに取引における性的役割分担、親族ネットワークの媒介性、そして集落間連関に注目しながら特徴づけを行っていく。そのうえで、牛乳家内加工がどのような条件が揃った結果として形成されてきたのかを、またそれが既存の取引回路とどのような関係にあるのかを検討する。ここでは、「フォーマル」な企業の牛乳集荷圏外にあって、自由化以後も流通経路が大きく変化していないメル山斜面上部の地域を考察対象とする。この地域は、乳牛飼養をめぐる流通自由化以前から行われている各種取引の姿をとらえるうえで好都合であるし、なによりも、ここにおいて他に先立って牛乳家内加工が現れ始めたのである。

第1節 経済自由化、乳牛飼養、農村零細企業

タンザニアにおいては、先進国型の保存・加工施設へと続く牛乳の流通経路は、1994年まで国営のタンザニア乳業会社（Tanzania Dairies Ltd.: TDL）によって大部分独占されてきた。1970年代中頃に設立されたTDLは、国有・私有の大牧場で生産された牛乳を集中加工して都市消費者に供給してきた。しかし、TDL下の加工場はいずれも稼働率50%未満で遊休状態を続け、さらに不適切な価格政策、集荷センター施設の故障、輸送上の障害などの理由で、TDLは破綻した。そして、1995年以降の牛乳流通加工自由化のなかで、TDLの全プラントは民営化の途上にある。一方、1980年代にはタンザニアにおける乳牛飼養の中心地であるキリマンジャロ（Kilimanjaro）州とアルーシャ（Arusha）州において女性酪農協同組合が設立され、これらは生乳に加えて酸凝乳を生産してダルエスサラームなどに向けて出荷している。また他州においても協同組合や企業体による牛乳の流通・加工がなされている（Tanzania [2000a]）。

しかし、これらの経路を通して処理されてきた牛乳は、全国生産量のごくわずかにすぎない。牛乳をめぐる取引・流通・加工の大部分は、国家が設定した品質・衛生基準とは無縁のところで、未組織状態の小農を主体とする、零細で対面的な、無数の経路によって維持されてきたのである。国家によって「インフォーマル」であると名指しされてきたこの経路は、牛乳の全国生産量の約66%、すなわち小農世帯における子ウシ摂取分と自家消費分を除く余剰のほとんどを流通させているという推計もある（MOAC, SUA and ILRI [1998: 9]）。この余剰分は、一部の小農によって集出荷され、非加熱処理のまま流通し、これによってアフリカ人都市消費者の拡大しつつある牛乳需要が満たされてきたのである。しかも、消費者は生乳や酸凝乳を選好するため、チーズをはじめとするより高次の加工品に対する国内需要は小さい。その結果、牛乳流通加工の自由化は、大規模なプラントの新設をとまなう新規参入を刺激するには至っていない。むしろ、より適正な規模の加工場の建設、ダルエスサラームなどの遠隔大消費地への輸送、生産者集団による都市ミルク・キオスクの開設などの動きが表面化し始めており、自由化はタンザニアにおける牛乳の加工・流通を多角化させつつあるとも考えられる（Tanzania [2000 a]）。だが、都市需要における生乳選好度は依然として高く、流通自由化が未組織小農主体で国家の規制から独立した生乳の流れの卓越性を大きく変化させるには至っていないと考えてよからう。

以上のような牛乳の加工・流通を支えているのが、小農複合経営の一環である乳牛舎飼いであり、小農の生計もまた、程度の差こそあれ牛乳流通や乳牛をめぐる各種の取引に支えられている。乳牛飼養には、自家用飲用乳の確保、接客・贈答用飲用乳の確保、堆肥の確保、現金稼得機会（牛乳、未經産牛、食用牛の販売）の形成といった多面的な意義が認められる。より広く位置づければ、乳牛飼養は、人口増加と土地不足を経験するなかで、限られた土地を集約的に利用し、かつ資源を有機的に結びつけて危険分散のための多角化を図りながら生計を維持する一助となる。このような農業集約化と生計多角化は、外生的で短期的な国家介入、あるいは国家規制の形式的撤廃によっ

て逆転されたり、あるいは消滅することのない、内生的で長期的な趨勢なのである。

小農が乳牛飼養の集約化・多角化を進める過程においては、単なる飲用乳自給やその小規模な商品化を超えて、付加価値を伴う乳製品を商品化する段階が発生しうる。遊休化した施設を抱えて破綻したTDLの例が示すように、タンザニアの場合、先進国型の資本集約的な設備による乳製品の大量生産は、相当の原料と需要を確保しなければ成り立たないはずである。しかし、そもそもチーズやバターといった乳製品は大規模な装置類を用いることなく生産することができ、国内需要に見合った小規模な生産・販売を行うことは小農によっても十分に可能なのである。

本章で検討するメル山斜面は、1994/95年において改良種乳牛の飼養頭数がタンザニア本土20州中第2位（シェア23.2%）であったアルーシャ州のなかで、乳牛飼養の中核となっている地域である（Tanzania [2000a]）。この地域のメル人小農社会にとって、乳牛飼養はいわゆる伝統的輸出作物であるコーヒーの生産以上に重要でありうる。小農コーヒー生産は、不安定な国際価格、投入財不足、老木化、小農家内加工による低品質といった問題や、流通自由化の余波を経験しつつあるからである。さらに、この地域では乳牛飼養の集約化・多角化を刺激しうる変化が近年生じている。それは、外国人観光客による乳製品需要の増大である。アルーシャ州を含むタンザニア北部では、国立公園を周遊する観光客の数が1990年代に入って急増してきた。とくに、セレンゲティ（Serengeti）、アルーシャ、キリマンジャロの3国立公園では、1998年から1999年にかけての訪問者数の増加が、それぞれ64.1%、56.2%、30.2%に達している（Tanzania [2000b: 139]）。1991年に導入された全国観光政策（National Tourism Policy）と、経済自由化の流れの両方が、タンザニアの観光部門に対する民間投資を誘発し、それが外国人観光客の増加につながっているとされる（Wangwe et al. [1998: 67]）。これに呼応して、観光客の乳製品需要の一部を満たすために牛乳家内加工を行い、生計をいっそう多角化させつつある世帯も、メル人小農社会のなかに少数ではあるものの現れているの

だ。すなわち、観光部門における自由化という政治経済的な変動が、都市への生乳出荷という流れから農村内加工への分流をつくりだし、いわば農村内前方連関の担い手である家内加工者を生み出すとともに、小農乳牛飼養の集約化・多角化において新たな局面を切り開いたといえるのである。

他方、1970年代後半以降、経済自由化に向けての構造調整政策を経て農村世帯が直面してきた農業危機と、都市農村双方における雇用の飽和状態とは、農村部の零細企業、いわゆる農村インフォーマル・セクターに含まれる企業の数急増させてきたと考えられる(池野 [1998])。しかし、タンザニアの農村で起こっているこうした変化については不明点が多く、研究の余地を多く残している。牛乳家内加工も、そのような緊急避難的で生存維持水準にある経済活動であると位置づけるべきなのだろうか。そもそも、どのような小農世帯が、どのような条件のもとで、観光客の乳製品需要のような新たな機会を利用する主体として農村零細企業を形成してきたのだろうか。この問題を解明していくためには、乳牛飼養をめぐるメル人小農の間に規則性・傾向性をもち、反復して取り交わされてきた取引の回路がどのようなものであるのかという検討課題を含めて、小農による牛乳生産流通の実態を、まずもって明らかにする必要がある。そのうえで、そうした取引回路と牛乳家内加工とがどのような関係にあり、そして前者は後者をどの程度支えているのかを検討していかなければならない。

主要な取引回路の性格を検討するに際しては、取引における性的役割分担、親族ネットワークが利用される程度、そして集落間連関に焦点を合わせる。東アフリカ小農社会における親族や地縁集団については、その弱体化と個別小農活動の解放が資本主義的な発展の担い手が生まれる前提であるという見方(Hyden [1987])や、そのような発展の桎梏ともなりうる、たとえば領域的な農村共同体といったものがそもそも存在するのか否かを検討する必要があるという見解(池野 [1999])までの幅をもって、繰り返し問われてきた。東アフリカ零細企業研究においても社会的ネットワーク論は分析枠組みの一つであり、そこにおいても親族が企業家精神の発展を内部束縛するというとらえ

方から、人々が血縁・地縁を含むさまざまなネットワークを形成し必要に応じて活性化させて企業経営に役立たせているという解釈まで存在する（上田[1997]）。本章においても、乳牛飼養をめぐる各種の取引回路が親族ネットワークをどの程度利用しており、それが牛乳家内加工という新たな活動にとってどのような意味をもつのかということを、重要な検討課題とする。

ところで、当然のことながら、乳牛飼養をめぐる各種の取引は地理的空間のなかで行われているのであり、本章での問題関心もこの文脈を抜きにして考えることはできない。東アフリカ定着農耕社会は、しばしば山地斜面という地理的空間の上に展開している。その比較的狭い範囲には、標高差に応じてさまざまな環境とそれに依存する集落が連続し、かつその全体が一つの民族集団の生活の場となっていることも少なくない。本章で取り上げるメル人小農社会も、その一例である。このような集落群は、人口増加と土地不足に起因する人口移動を通して形成されてきたものであり、その結果として個々の集落は親族をはじめとした各種の社会的ネットワークによって結びついている。こうしたネットワークは、集落の間に多様な取引関係、すなわち集落間連関を生み出す媒体となり、これがたとえば農耕と家畜飼養の複合を強化する形で集約化・多角化を促進していくこともありえよう。乳牛飼養をめぐる取引回路についても、それが集落間にまたがって広がりうることを前提としておかなければならない。そこで、本章でも、まずは集落群における人口移動の軌跡を描き出すことが必要となってくる。

ここでは、調査対象世帯を絞り込むための、そして異なる場所の間の乳牛飼養をめぐる連関を検討するための、方法論上の空間単位として「集落」という概念を使用し、タンザニアの行政村を構成する村区(kitongoji)をこの集落とみなして検討を進める。調査対象集落は、「フォーマル」な企業の牛乳集荷圏外におかれて自由化後も流通経路が大きく変化していない斜面上部地域から選択する。これによって、相対的に自由化の影響を受けていない状態の取引回路を検討することができよう。また、これは乳牛飼養をめぐる集落間連関の一つである飼葉運び上げの上限を確認することにもつながる。しかし、

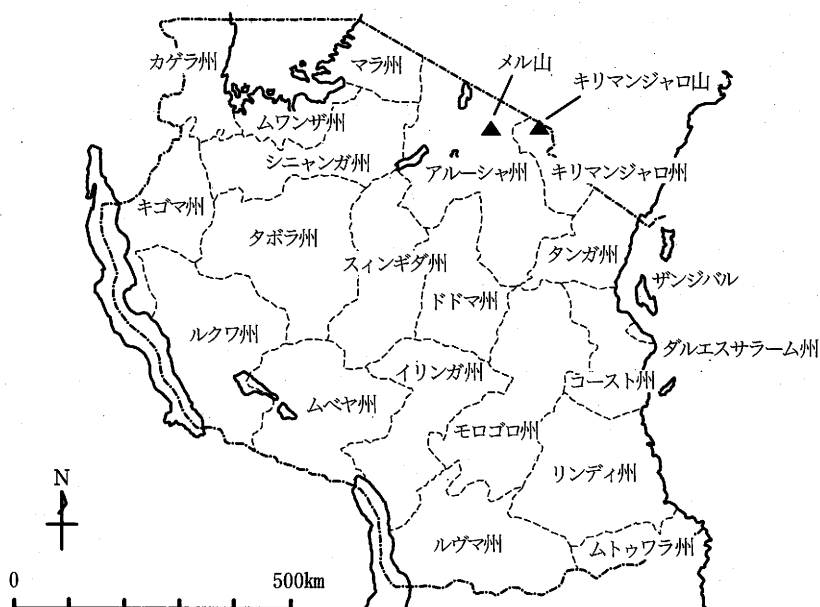
なによりも、この地域が牛乳家内加工を生み出したことが重要なのである。

第2節 対象地域の概観

1. メル山斜面の標高帯と家畜飼養

メル山斜面地域は、タンザニア北部のアルーシャ州に位置している（図1）。同州は生業的牧畜や大規模小麦栽培が行われている広大な半乾燥地域を抱えているが、人口の大半は北部のメル山周辺に集中して定着農耕社会を形成している。この一帯は、植民地期に導入されたコーヒーを中心とした換金

図1 タンザニア本土各州とメル山の位置



(出所) 筆者作成。

作物生産などによって早い段階から貨幣経済化が進んだ、タンザニアにおける相対的先進地域である。州庁所在地のアルーシャ市はこの地域の中心都市であり、1988年センサスによれば人口13万4708を擁する。メル山一帯はアルーシャ市とアルメル(Arumeru)県に含まれている。同県の人口は32万1835(1988年、アルーシャ市人口を除く)であり、1996年までに可耕地の98.8%がすでに耕地として利用されている。主食は料理用バナナとメイズである。コーヒーについては、1990年代において州の総生産量の約7割をアルメル県が生産している。他方、同県のサイザル生産は漸減傾向にあるのに対して、1995年以降、ヨーロッパ向けの輸出作物として花卉が生産され始めている。また、1984年の家畜センサスによると、同県にはアルーシャ州全体のゼブ型在来種のウシの8.4%がみられるにすぎないのに対して、改良種の乳牛については同州全体の90.2%が集中していた(Tanzania [1998])。

メル山(標高4565メートル)南東斜面のメル人小農社会は、大きくみて山腹、山麓、低地という三つの標高帯から構成されている(図2)。ここでいう「山腹」とは、標高1500メートルを中心とした一帯のことを指している。その上限は森林保護区に接する1800メートル付近、下限は大農園に接する1300メートル付近である。この地域には散居村が点在する。他方、「山麓」とは、大農園や、その合間に形成された自然発生的な新開村、そして旧農園を政府が再配分した結果生まれた新開村などが連なる標高1300～1200メートル付近を指す。多くは散居村である。そして、「低地」とは、山麓よりも下に位置する標高1100～1000メートル付近を中心とした平原部分であり、一部は大規模なサイザル園によって占められている。ここに展開する集落のなかには、1970年代中頃のウジャマー集村化によって家屋が道に沿って並べられた列状村の形態をなすものもみられる。山腹から低地までの水平距離は20キロメートル前後、比高は700～800メートル程度であり、比較的コンパクトな斜面地域にメル人を主体とした集落群が展開している⁽¹⁾。年間降水量は、山腹では1500ミリメートル程度であるのに対して、山麓では1200ミリメートル強、低地では800ミリメートル弱と斜面を下るのにしたがって減少していき、半乾燥地域の

表1 メル山南東斜面における在来種ウシと改良種乳牛の空間的分化

| | 標高 (m) | 在来種ウシ(頭) | 改良種乳牛と その雑種 (頭) |
|---|-------------|----------|--------------------|
| ソングロ村 ンコアサクヤ村区 (1999年) ¹⁾ | 1,700 | 0 | 71 |
| ングルドト村 (1999年) ²⁾ | 1,200~1,300 | 1,336 | 2,959 |
| マロロニ村 (1997年) ³⁾ | 1,000~1,100 | 1,950 | 50 |

(出所) 1) 1999年 8 月筆者調査による (30世帯)。

2) 1999年 8 月マジ・ヤ・チャイ (Maji ya Chai) 地区農業官 (bwana shamba) からの聞き取り。

3) *Taarifa ya Kijiji cha Maroroni Kuanzia Mwaka 1951 hadi 1997* (1951~1997年マロロニ村報告) による。

されているのである。その後、植民地支配が悪化させた土地不足と人口増加によって山腹の土地は細分化され、また在来種のウシの放牧地は耕地に転用され、放牧地や季節作物耕地の一部は山麓や白人農園より下の低地に求められるようになった。

1950年代末まで、山腹世帯は、山腹の混作屋敷地・季節作物耕地と、山麓・低地の放牧地および季節作物耕地の両方を生業の場とし、その間で放牧のために家畜を移動させていた (Spear [1997])。このような家畜の垂直移動は、乳牛舎飼いが導入されて以降、標高帯ごとに程度の差はありうるものの、大きく変化したと考えられる。とくに、山麓の村では低地村の耕地からメイズ・マメの茎葉を搬入して飼葉として乳牛に与えている。すなわち、山麓以下への家畜の放牧に代わって、現在では逆方向への飼葉搬送がなされている。山腹部における改良種乳牛の舎飼い導入が物質的移動の方向性を変化させたのであり、家畜の垂直移動から飼葉の垂直移動へと家畜をめぐる集落間連関の組み替えが起こったということができる。飼養されているウシの分布をみると、山腹から下るにしたがって、改良種乳牛の比率が低下し、在来種の比率が上昇する (表1)。一般に、ゼブ型在来種の方が耐暑性、耐乾性、疾病に対する抵抗性に優れているのに対して、泌乳量は外来の改良種乳牛に劣るとき

れるが、メルの人々もこれらを低地に改良種乳牛が少ないことの理由としてあげている。こうして、現在、山腹部から山麓部にかけては、バナナとコーヒーの栽培に乳牛の舎飼いを複合させた集約的な混作屋敷地⁽²⁾と、季節作物耕地が連続している。低地部においては、季節作物耕地と放牧地が卓越しているが、灌漑水路を利用できる部分においては、これに加えてバナナが屋敷を囲んでいる。ここではコーヒーは栽培されていない。

2. 山腹の最上部集落

第1節で述べたように、本章では山腹のなかでも最上部の集落を主な検討対象とし、1999年8月および2000年8月に行った調査をもとに考察を進める。最上部集落の一例として、標高1700メートル付近に位置するソングロ (Songoro) 村をとりあげる (図2)。1988年センサスによれば、ソングロ村は1514人を擁していた。村は四つの村区に分かれている。本章では、村役場を含み90前後の屋敷地からなるンコアサクヤ (Nkoasakuya) 村区において、乳牛飼養をめぐる取引回路を検討する。そして、並行して見いだされた牛乳家内加工世帯の事例について考察を進める。これらの世帯は、同村区ではなく、ソングロ村の他村区、隣接するムララ (Mulala) 村 (1569人 <1988年センサス>)、そしてンコアランガ (Nkoaranga) 村 (2422人 <同>) 上部に位置しているが、いずれも山腹上部に含まれる。

ソングロ村では、メイズの二期作が行われている。しかし、3月から6月にかけての大雨季作は、標高が高く低温であるために結実に至らないこともあり、これは乳牛その他の家畜の飼料作物生産と位置づけられている場合も多い。7月から翌年2月にかけての小雨季作の方が、食糧生産においては重要である (図3)。近年、休閒はほとんど実施されていないが、連作障害を意識して輪作を行う場合はみられる⁽³⁾。標高1600～1700メートル付近に広がるムララ村でも、大雨季時は多雨低温のためメイズ農耕活動の休止期間にあっている。メル山南東斜面では、標高に応じて季節作物の農事暦が異なる。

図3 メル山斜面各村における季節作物の農事暦

| | | 1月 | 2月 | 3月 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 |
|--------|---|----|------|-----|-----------|----|----|----|-----|----|-----|--------|-----|
| ソングロ村 | M | | h | c s | (飼葉として利用) | | | c | s | w | | | |
| | B | | | | | | | c | s | | | | h |
| ムララ村 | M | h | c s | | w | | | h | c s | w | | | |
| | B | | | | s | | | h | | | | | |
| ングルドト村 | M | | h cs | w | | | | h | | | c s | w | |
| | B | | h | s | | | h | s | | h | s | | |
| マロロニ村 | M | c | | s | | | | | | | h | | |
| | B | | | | s | | | h | | | | (刈跡放牧) | |
| キスイミリ村 | M | | | h | | | | | h | c | | s | |
| | B | | s | h s | | | | h | | | | s | c |

M...メイズ B...マメ
 c...耕起 s...播種 w...除草 h...収穫

(出所) 筆者の調査による。

しかし、標高1300メートル付近の山麓新開村ングルドト (Ngurdoto) および 1100~1000メートル付近の低地新開村マロロニ (Maroroni) の例と比較すると、異なる標高間で農繁・農閑期の相補関係は認められず (図3)、労働力の季節的な集落間移動は顕著ではない。ソングロ村を含む山腹から山麓にかけては、食糧生産に加えて集約的なコーヒー栽培や乳牛飼養も行っているために農作業量は多く、山麓や低地に下りて他者の農作業を手伝う例は多くない。

すでに触れたように、ソングロ村においても、乳牛の舎飼いが導入される以前は放牧のために家畜を移動させていた。メル个村名や村区名にしばしば現れるンコア (nkoa) とは、「ウシの道」の意である。調査対象村区であるンコアサクヤは、「サクヤ翁のウシの道」を意味する。かつて同村区の人々はこの道を通ってより上部の放牧地に出向き、ウシの日帰り放牧を行っていた。ンコアサクヤからは他にも2本のンコアがムララ村に延びており、かつては

やはり日帰り放牧のために使われていたが、それが山麓や低地にまで達するものであったかどうかは不明である。しかし、山麓のングルドト村における草分け農民の記憶によれば、1960年代中頃まではムララとその周辺のキリング(Kilinga)村、ンジャニ(Ngyani)村から日帰り放牧する人々がみられたが、最上部のソングロ村から下りてくる畜群はなかったという(図2)。ソングロ村では、メル山北麓に入植していた南アフリカ系白人から1950年代中頃に改良種乳牛を入手してその舎飼いが始まり、これが一般化するにつれて、40エーカーほどの村有放牧地は徐々に利用されなくなり、1970年代後半までに村有賃貸耕地に転用されて消滅した。こうして、乳牛飼養をめぐる各種の取引が現在みられるような舎飼いを前提とした姿へと変化していくのである。

乳牛飼養に関する取引の実態については、ンコアサクヤ村区を構成する小農世帯のうちすでに基本情報の聞き取りを済ませている30世帯から、さらに16世帯を選んで把握する。この16世帯は、村区を構成する主要なりネージに属するものを優先して選び出したものである。また、第4節において飼葉の集落間調達の実態を理解するために、標高1400～1500メートル付近に広がるアケリ(Akeri)村のマリング(Maringa)村区とその周辺における16世帯の事例を比較材料として提示する。両村区の事例とも無作為抽出による確率標本ではなく、空間的に隣接する世帯の集まりとなっている。

検討に入る前に、これら2村区の対象世帯についての基本情報を比較しておく(表2)。世帯主の年齢分布については大きく異ならないが、平均世帯人員はンコアサクヤの方がやや多い。土地所有面積も平均値でみると大差なく小さいが、マリングの方が世帯間格差が大きい⁽⁴⁾。コーヒー出荷量はンコアサクヤの方が少ない。乳牛飼養頭数も同村区の方が若干少ないが、両村区世帯とも零細であることには違いない。低地に耕地を所有する世帯はンコアサクヤで多く、低地で耕地を借用する世帯はマリングが多い。ンコアサクヤでは農業労働力の季節的雇用が少ない点、さらに構成員のなかに農外就労者を擁する世帯が少ない点で、マリングとは対照的である。しかし、両村世帯とも大多数がメイズを購入しており、自作分では不足していることがうかがえる。

表2 対象集落のプロフィール

| | 各 変 数 | | 分 布 | | | 低地土地 所有世帯 の比率 (%) (ケース数) | 低地土地 借用世帯 の比率 (%) (ケース数) | 農業労働 力重い人 の比率 (%) (ケース数) | 農外就労 世帯の比 率 (%) (ケース数) | 食糧購入 世帯の比 率 (%) (ケース数) |
|-------------------------|----------------------------------|------|------|-------|-------|--------------------------------------|--------------------------------------|--------------------------------------|------------------------------------|------------------------------------|
| | 変 数 | ケース数 | 最 小 | 最 大 | 平 均 | | | | | |
| ソングロ村 ンゴアサクヤ村 区 | 世帯主の年齢 (歳) | 30 | 22 | 72 | 50.4 | 15.6 | | | | |
| | 世帯人員 (人) | 30 | 3 | 12 | 6.7 | 2.3 | | | | |
| | 所有地面積 (エーカー) | 30 | 0.5 | 5 | 2.1 | 1.1 | 33.3 (30) | 26.7 (30) | 43.3 (30) | 80.0 (30) |
| | コーヒー出荷量 ¹⁾ (キログラム) | 29 | 0 | 1,000 | 163.2 | 250.6 | | | | |
| | 乳牛頭数 (頭) | 30 | 0 | 5 | 1.5 | 1.0 | | | | |
| アケリ村 マリンダ村区と その周辺 | 世帯主の年齢 (歳) | 16 | 33 | 73 | 53.6 | 13.5 | | | | |
| | 世帯人員 (人) | 16 | 3 | 12 | 6.1 | 2.2 | | | | |
| | 所有地面積 (エーカー) | 16 | 0.25 | 6 | 2.1 | 2.1 | 18.8 (16) | 68.8 (16) | 56.3 (16) | 81.3 (16) |
| | コーヒー出荷量 ²⁾ (キログラム) | 15 | 0 | 1,440 | 375.7 | 550.3 | | | | |
| | 乳牛頭数 (頭) | 16 | 1 | 5 | 2.0 | 1.2 | | | | |

(注) 1) 1998/99コーヒー年度。

2) 1999/2000コーヒー年度。

(出所) ソングロ村ンゴアサクヤ村区については1999年8月、アケリ村マリンダ村区とその周辺については2000年8月の筆者調査による。

ンコアサクヤの30世帯からさらに絞り込んだ16世帯についても、以上のような特徴を指摘することができる。マリंगाを含むアケリ村はアルーシャ市に通じる街道にほど近い都市近郊農村であり、多くの世帯がブロック造りの電化した家屋に居住している。詳しく触れる余裕はないが、ここがたどってきた農業史、開発史は、最上部村のソングロとはかなり異なっているといつてよい。その点が、コーヒー出荷量と農外就労の多さ、そしてこれに対応する農業労働者雇い入れの多さとなって現れている。

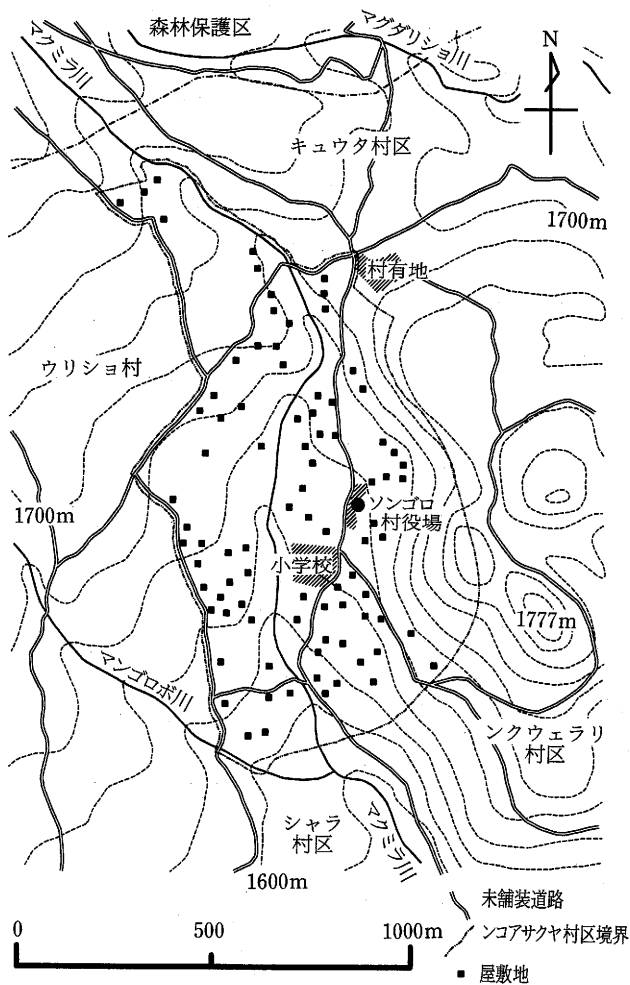
第3節 親族ネットワークと乳牛飼養をめぐる取引回路

1. 親族ネットワークの空間

乳牛飼養をめぐる取引の実態、そして牛乳家内加工を成立させている基盤を検討するための出発点として、本節ではソングロ村ンコアサクヤ村区の小農が取引に際して利用しうる親族ネットワークの空間的分布を明らかにする。

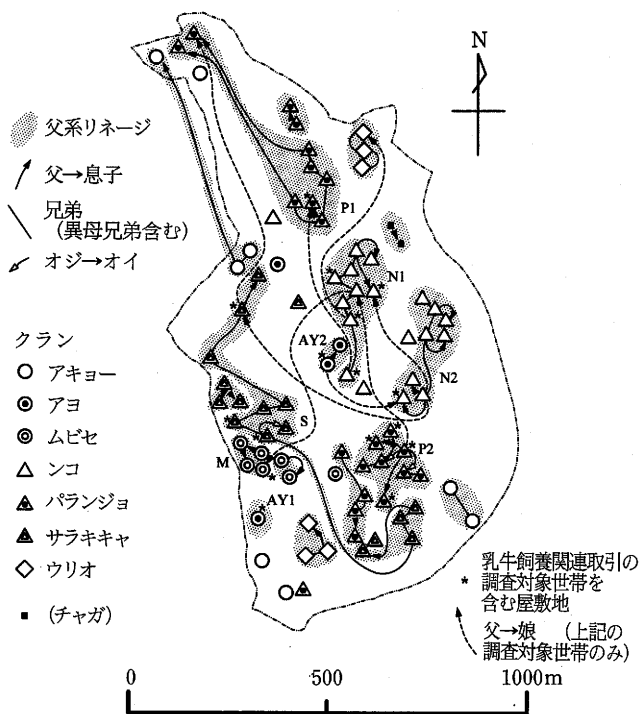
メル人の集落は、父系制、リネージ外婚、夫方居住婚、夫方クラン婚入⁽⁵⁾といった原則のもとに、その内部に複数のクランが混住する社会を構成している。父の土地や家畜は年長の息子から順に徐々に生前贈与されていき、残りの土地、家畜、家屋は老親扶養の義務を負うとされる末子によって相続されてきた。生前贈与された土地が不十分な場合は、年長者から順に他所で新規開墾を行った。このような外延的拡大が、以前は森林であった現在のンコアサクヤ村区一帯(図4)に及んだ年代を示す手がかりの一つとして、1952年に標高1500メートル付近に位置するンコアランガ村から草分け農民として入植した例がある。また、村区名に名を残しているサクヤ翁は、標高1400メートル付近のンジャンニ村から入植した開拓者である。村区民の混作屋敷地は、緩斜面を選んで点在している。緩斜面のうち屋敷のまばらな部分には、季節作物耕地がまとまって存在している。また、村区東側の急斜面も一部は耕地と

図4 ソンゴロ村ンコアサクヤ村区とその周辺



(出所) Usa River (1 : 50,000, Sheet 55/4, 1990年) 地形図, および筆者の調査による。

図5 ソンゴロ村ンコアサクヤ村区内の父系リネージ（屋敷地の分布）



(注) リネージMには遠縁の親族が含まれているが、図中には続柄を示していない。

(出所) 筆者の調査による。

して開かれているが、土壌侵食の危険に直面している。

ここで、図5によって村区内における父系リネージの空間的配置を確認しておく。この図が示すのは世帯の夫にとっての親族ネットワークであり、また夫方親族に強く関与することが期待されている妻にとってのネットワークである。村区内には、87の屋敷地が確認された（西隣のウリショ〈Urisho〉村民であるにもかかわらず村区内に屋敷地を構える3、4例を除く）。これらのなかには、同一リネージに属する多世帯同居の屋敷地が含まれている。それぞれの屋敷地に居住する世帯の間の系譜関係とリネージの範囲は、30世帯に対する

聞き取りと、後述する乳牛飼養関連取引の調査によって明らかとなった情報に基づいて認定した。現段階では聞き取りを行っていない屋敷地が全体の3分の2近くに達し、村区総人口は示しえないが、30世帯の平均構成員数は6.7人である(表2)。図5中の実線は父系の系譜関係を示している。他方、図中の破線は、乳牛飼養調査によって確認された取引のうち、リネージ間の婚姻関係によって媒介されていたものを示したものである。この破線は、したがって村区内に展開しているすべての婚姻関係を示したものでは必ずしもない。

図5が示すように、村区内には七つのメル人クラン、すなわちアキョー(Akyoo)、アヨ(Ayo)、ムビセ(Mbise)、ンコ(Nnko)、パラングョ(Pallangyo)、サラキキャ(Sarakikya)、ウリオ(Urio)に分属する15のリネージと、これらのリネージに含まれない11の世帯がある。加えて、元ソングロ小学校教師でメル人女性と結婚したチャガ人のリネージが一つある。構成屋敷の多いリネージが兄弟関係を中心にして成り立っていること、そして各リネージが空間的に凝集した形で存在していること、これらは兄弟が父からまとまった土地を順次贈与され、独立していった過程を物語っている。

次に、人口移動によって形成された、村区を越える親族ネットワークの空間を明らかにする。村区内の30世帯について、世帯主の兄弟姉妹の現住地をみると(表3)、過半数は同村内か、標高1200メートル以上の近傍の山腹・山麓部に留まっている。だがこれ以外への転出も多く、その場合には東麓方面から北斜面にかけての地域を選択しており、南斜面の低地村への移動は皆無である。とくに女性の転出が目立つが、その多くは婚姻を契機としたものである。ンガレ・ナニユキ(Ngare Nanyuki)に対しては、1950年代後半以降、親族集団の構成員がその集団に属する先発転出者の移住先へ向けて行う連鎖的移住がみられ、とくにキスイミリ(Kisimiri)村への流れが多い⁽⁶⁾。また、北斜面には対象世帯主の土地保有ケースが集中しており、これは兄弟姉妹の移動先と明瞭に重なり合っている。世帯員自らが赴いて耕作に従事しているのは1例のみであり、他は保有先の親族に耕作させて収穫を分け合っていた。

表3 対象世帯の集落間親族ネットワーク (ソングロ村ンコアサクヤ村区)

| 標高帯 | 兄弟姉妹・親族の現住村・地域および土地所有・借用先 | 兄弟(人) | 姉妹(人) | 他の親族(人) | 山腹外部での土地所有(世帯) | 山腹外部での土地借用(世帯) |
|------------------|---------------------------|-------|-------|---------|----------------|----------------|
| 1700m | ソングロ (Songoro) | 20 | 22 | | | |
| | ムララ (Mulala) | | 2 | | | |
| | スラ (Sura) | | 1 | | | |
| 1600m | ウリシヨ (Urisho) | | 4 | | | |
| | クリンガ (Kilinga) | | 3 | | | |
| 1500m | ンコアラング (Nkoaranga) | 1 | 3 | | | |
| 1400m | ンシュブ (Nshupu) | 1 | | | | |
| 1200-1300m | ングルドト (Ngurdoto) | 2 | | 2 | | |
| | インバセニ (Imbaseni) | | 1 | | | |
| | マジ・ヤ・チャイ (Maji ya Chai) | | | | 1 | |
| | キカティティ (Kikatiti) | | | | 1 | |
| | キンゴリ郡 (King'ori) | 2 | 5 | 5 | 1 | 1 |
| 東麓 (1000-1300m) | レグルキ郡 (Leguruki) | 2 | 2 | 4 | | |
| 北山腹 (1400-1700m) | ンガレ・ナニユキ郡 (Ngare Nanyuki) | 5 | 15 | 11 | 8 | 4 |
| | アルーシャ市 | 2 | 1 | | | |
| 1400m | アルーシャ州他県 | 2 | 1 | 1 | | |
| | キリマンジャロ州 | | 2 | 1 | | |
| | ダルエスサラーム州 | 2 | | | | |
| | 不明 | | 1 | | | |
| | 合計 | 39 | 63 | 24 | 11 | 5 |

(注) 「兄弟姉妹の現住村・地域」とは、調査対象とした30世帯の世帯主の生存する兄弟姉妹の現住村・地域であり、(1)回答者本人を除いて集計し(30名の回答者はすべて男性であるため、「兄弟」の総数は「姉妹」のそれに比べて少なくなっている)、(2)複数の回答者が互いに兄弟関係にある場合は、回答された兄弟姉妹の重複を避けて集計した。
(出所) 1999年8月の筆者調査による。

2. 乳牛飼養をめぐる取引慣行

次に、乳牛飼養に関連して人々が取り交わしている各種の取引慣行について説明する。乳牛飼養は、農耕と物質的に結びついた活動である。すなわち、食用作物の茎葉が乳牛に対して与えられ、乳牛の排泄物が堆肥として農耕を支える。飼養中に得られる牛乳は自家消費、あるいは売却され、子ウシも重要な現金収入源となる。

ンコアサクヤ村区で用いられている飼葉のうち、繊維分が多く可消化養分が少ない粗飼料としては、バナナ・メイズ・マメの茎葉やネピアグラス（エレファントグラス）などがある。これらはいずれも取引対象となる。バナナ茎葉は1年中、メイズ・マメ茎葉は小雨季作後半の12月～1月（間引き分と乾燥飼葉）と、大雨季作後半の6月～8月（青刈り分）に、ネピアグラスなどは大雨季を除く月に刈り取る。並行して、繊維分が少なく可消化養分の多い小麦のふすま、メイズ・綿花などを加工する際に出るかす類、そして魚類の骨などのいわゆる濃厚飼料も、乳量を増すためにほぼ1年中用いられている。これらは塩などとまぜた配合飼料の形で与えられており、ブンバ（pumba）と呼ばれている。ブンバには、国家製粉公社（National Milling Corporation: NMC）や民間企業の市販品を購入する場合と、原料を個別に購入して自家配合する場合とがある。

牛乳に関わる取引のうち一定の部分は、飼養サイクルに内在する理由で必要となる。村区内に多くみられるエアシャー種やフリージアン（ホルスタイン）種といった改良種の乳牛、あるいはこれらと在来種との交配種の泌乳期間は、9カ月ほどの妊娠期間を経て、分娩後に始まり約10カ月間続く。分娩後10日間ほどの初乳はもっぱら子ウシへの哺乳用であり、また泌乳期間最後の1カ月間の乳も人間の飲用には適さない。こうして、1泌乳期のうち搾乳可能な期間は8カ月程度となるが、後半には乳量が減少する。小農たちは、乳量減少を抑えるために、分娩後それほど間をおかずに次の受精を行って、乳量が

顕著に減少する前に次の分娩・泌乳期を迎える必要があることを認識している。しかし、そうした生産最大化を実現できなかった場合には、飲用乳不足に直面することになる。飼養頭数が零細であれば、この問題はそれだけ回避しにくいし、また疾病による泌乳量減少の影響も重なりうる。そのようなときに、自家消費用牛乳を確保するための取引が行われるのである。

さて、本節では、ンコアサクヤ村区の16世帯に対して行った聞き取りに基づいて、飼葉、牛乳、乳牛の取引について概観する。対象世帯の夫・妻がこれらを対象として行った取引を、贈答や売買などの取引形態別に最新のものから遡って過去3回まで回顧してもらい、合計365の取引事例を収集した。これらの取引対象をめぐるのは、貸出と借入（貸借）、受委託、無償贈与と無償受領（贈答）、売却と購入（売買）、そして物々交換があり、本章ではこれらを取引の形態と表現しておく。

まず、飼葉と牛乳をめぐる貸借（メル語でシャークヤ〈shaakuya〉）と物々交換（テーラシェニ〈tiilasheni〉）の慣行についてみてみよう。いずれも取引対象の不足した世帯がもちかけ、数カ月 にわたって毎日少量ずつ取引される場合もある。貸借は、返済義務を相互に了解し合う契約関係である。他方、飼葉と牛乳の物々交換は、乳牛の泌乳量減少、搾乳不能、あるいは不在などの理由で自家用牛乳不足状態にある世帯が、飼葉余剰と交換に牛乳を得る取引である⁷⁾。交換比率は、バナナ茎葉であれば1～2束（1株程度）に対して牛乳1パイントである（現地では2パイントを1リットルとする計量・換算法が一般的である）。この量の飼葉は、1、2頭の乳牛に対する2、3度の給餌ですべて消費される。また、飼葉と牛乳は、贈答、売買の対象ともなる。牛乳取引の場合は、一時的な不足分を補完するだけでなく、末娘による老母扶養や割礼した息子の「体力回復」のために取引が長期化する場合もあれば、手土産用や接客用のように少量で一過性のこともある。贈答には、贈与が後日何らかの形で互酬的に返礼されているにもかかわらず、無償でなされたと回答されている場合を含む。たとえば、耕作や食事準備を手伝ったことに対する返礼の意味で贈与を受けたとする回答も、一部含まれている。この場合は、貸借

や物々交換と実質的に同じであるとも考えるので、以下ではこれらを一括して現金不在取引と呼ぶ場合がある。

乳牛をめぐる取引の場合、飼葉・牛乳の貸借に相当するのが、飼養の受委託（ヤーリア *yaaria*）慣行である。雌ウシについては、委託者は受託者の飼養労働力と飼葉、そして委託中に生まれた子ウシすべてを自分のものとし、受託者は飼養中の搾乳権と堆肥を受け取る。堆肥の獲得は重要ではあるが、これが単独で取引の対象となることはない。子ウシについては受託者が買い取る契約をあらかじめ結ぶ場合もあり、この場合は受委託関係は現金化してくる。こうした受委託は、少数例ではあるが小農世帯と公的組織の間で行われることもある。たとえば、あるキリスト教会組織は、雌ウシを小農に委託し、雌ウシが誕生したところでこれを受託者から回収して次の小農に委託する一方で、もとの雌ウシを受託者に贈与するという活動を行っている。他方、雄ウシ受委託の場合は、肥育し肉牛として売却することが目的であって、その意味で初めから現金化しているが、委託者は受託者の労働力・飼葉、そして売却益の4分の3程度を、受託者は種付料金収入、堆肥と売却益の4分の1程度を受け取る⁽⁸⁾。

最後に、乳牛をめぐる物々交換についてみると、中心は雄ウシと未經産牛の交換、乳牛と土地の交換だが、ラジオなどと乳牛との交換例もみられる。乳牛の贈答については、ほとんどが父から息子への生前贈与だが、妻の出身リネージに婚資として支払われたものも含まれる。他方、乳牛の売却は、家屋・土地・雌ウシ購入資金の捻出、治療費・教育費の捻出、肉牛販売、泌乳量の少ない雌ウシの処分、利用可能な飼葉量に合わせた頭数減らしなどの理由でなされ、また購入は以上に述べてきたような乳牛飼養がもつ多様な目的を実現するためになされている。

3. 主要な取引回路の特徴

山腹上部の集落では、以上のような取引慣行のどれが人々の間で規則性・

傾向性をともなう反復され、本章でいう取引回路を構成しているのだろうか。そして主要な回路は、取引における性的役割分担、親族ネットワークの媒介性、集落間連関といった観点からみた場合、どのような特徴をもっているのだろうか。ンコアサクヤ村区16世帯の夫妻が回顧した365の取引事例をもとにして、これらの点を検討する⁽⁹⁾。

まず、取引事例が実際に取引交わされた年次について確認しておく、取引年不明の11件を除く全取引の40%が調査年である2000年に行われており、また81%が1997年以降に、91%が1992年以降に行われていた。年次不明の11取引、そして1950年代から1970年代にかけてなされた9件の取引のすべては、乳牛に関わるものである。乳牛取引の生起は飼葉や牛乳のそれよりも時間間隔が広く、その記憶がより過去に遡っていく傾向にある。飼葉と牛乳については、取引の大部分が近過去に収まっており、現在の取引であると考えて差し支えなからう。

全取引事例のうち、物々交換以外の取引、すなわち貸借・受委託、無償の贈答、売買の割合は、91.2%(333件、表4)に達する。飼葉と牛乳は、取引件数でみた場合、贈答が中心だが、売買も少なくない。しかし、贈答取引の平均数量は、飼葉、牛乳とも小規模にとどまっており、その値はバナナ茎葉以外の飼葉については売買だけでなく貸借にもおよばない。取引の平均数量は、取引1件当たりの平均値だが⁽¹⁰⁾、牛乳については一過性の少量贈与も集出荷者に対して毎日数カ月続く売却も等しく1件として積算している。現金取引が浸透しているなか、これらの日常的な財をめぐる贈答の規模は大きくないことは明らかであり、自給補完的な取引が中心であると考えられる。他方、資産としての意味を強くもつ乳牛については、売却・購入取引の頻度が高く、また1回の取引でやり取りされるのは、すべての場合について1頭のウシであった。他方、物々交換の中心は飼葉・牛乳交換と乳牛放出交換だが、これらは取引総数のわずか8.8%(32件、表5)にすぎない。物々交換の少なさは、売買を支える現金が村区内に存在していることを示すといえよう。

表4 乳牛飼養をめぐる取引の件数と平均数量

(物々交換を除く。ソングロ村ンコアサクヤ村区)

| 取引対象 | | 取引形態 | | | | | | | | 合計 | | | | | |
|------|-----------|-------|------|-------|-------|------|------|------|------|----|-------|----|------|-----|------|
| | | 貸出・委託 | | 借入・受託 | | 無償贈与 | | 無償受領 | | 売却 | | 購入 | | | |
| | | 件数 | 平均数量 | 件数 | 平均数量 | 件数 | 平均数量 | 件数 | 平均数量 | 件数 | 平均数量 | 件数 | 平均数量 | | |
| 飼養 | 全取引件数 | 5 | | 2 | | 33 | | 21 | | 9 | | 23 | | 93 | |
| | バナナ茎葉(株) | 1 | 1.0 | 0 | | 11 | 1.7 | 5 | 2.2 | 2 | 8.6 | 5 | 6.9 | 24 | 3.4 |
| | 他(エーカー) | 4 | 0.09 | 2 | 0.14 | 20 | 0.04 | 15 | 0.07 | 7 | 0.23 | 18 | 0.32 | 66 | 0.15 |
| 牛乳 | 全取引件数 | 13 | | 5 | | 36 | | 33 | | 26 | | 27 | | 140 | |
| | (バイント) | 9 | 24.4 | 5 | 265.0 | 24 | 19.2 | 28 | 28.5 | 13 | 314.2 | 25 | 99.3 | 104 | 86.2 |
| 乳牛 | 全取引件数(頭数) | 10 | 1 | 5 | 1 | 8 | 1 | 14 | 1 | 35 | 1 | 28 | 1 | 100 | 1 |
| 合計 | | 28 | | 12 | | 77 | | 68 | | 70 | | 78 | | 333 | |

(注) 取引対象・形態ごとに最新のものから遡る形で、16世帯の夫・妻が取引を過去3回まで回顧した結果に基づく。

取引数量は、不明の39件(バナナ茎葉1件、バナナ茎葉以外の飼養2件、牛乳36件)を除いて集計・平均した。

(出所) 2000年8月の筆者調査による。

表5 乳牛飼養をめぐる物々交換(ソングロ村ンコアサクヤ村区)

| | | | 物 々 交 換 の 形 態 (件 数) | | | | | | 合 計 |
|--------------|--------|----|-----------------------|-------|-------|-----------|---------------------|----------------------|-----|
| | | | 飼 葉 と 牛 乳 | | | 乳 牛 と 財 産 | | | |
| | | | 飼葉→飼葉 | 飼葉→牛乳 | 牛乳→飼葉 | 乳牛→乳牛 | 乳牛→財産 ¹⁾ | 財産 ²⁾ →乳牛 | |
| 取引主体と取引相手の性別 | 夫 | 男性 | 1 | | | 6 | 6 | 4 | 17 |
| | | 女性 | | | | | | | 0 |
| | 妻 | 男性 | | 4 | 6 | | | | 10 |
| | | 女性 | | 1 | 4 | | | | 5 |
| 取引相手の居住地 | 村区内 | | 1 | 1 | 7 | | 2 | 2 | 13 |
| | 近隣地区・村 | | | 4 | 3 | 3 | 1 | 2 | 13 |
| | その他 | | | | | 3 | 3 | | 6 |
| 合 計 | | | 1 | 5 | 10 | 6 | 6 | 4 | 32 |

(注) 物々交換の形態ごとに最新のものから遡る形で、16世帯の夫・妻が取引を過去3回まで回顧した結果に基づく。

「近隣村区・村」とは、ソングロ村ンコアサクヤ村区に境界を接する村区・村をさす。

1) ヒツジが1例、土地が5例。

2) 土地が1例、ラジオが2例、砂利が1例。

(出所) 2000年8月の筆者調査による。

表6 乳牛飼養をめぐる取引における性別と親族選択性
(物々交換を除く。ソングロ村ンコアサクヤ村区)

| 取引の 対象 主体 性別↓ | | | 取 引 形 態 (件数) | | | | | | | | | | | | 合 計 | |
|------------------|-----|------------|-----------------|-------------|-----------------|-------------|----------------|--------------|----------------|------|---------------|--|---------------|--|-----|--|
| | | | 貸出・委託 親族 非親族 | | 借入・受託 親族 非親族 | | 無償贈与 親族 非親族 | | 無償受領 親族 非親族 | | 売 却 親族 非親族 | | 購 入 親族 非親族 | | | |
| 飼葉 | 夫 | 男 性 女 性 | 2 1 | 1 1 | 6 5 1 1 | 3 5 1 1 | 1 6 | 5 1 | 1 7 | 6 11 | 18 23 2 1 | | | | | |
| | 妻 | 男 性 女 性 | 1 1 | 6 2 10 3 | 1 2 5 4 | 7 1 | 1 1 2 2 | 16 6 18 9 | | | | | | | | |
| | 小 計 | | 3 2 | 2 0 | 23 10 | 9 12 | 8 1 | 9 14 | 54 39 | | | | | | | |
| 牛乳 | 夫 | 男 性 女 性 | | | 1 1 | 1 1 | 3 4 | 4 5 | 9 11 0 0 | | | | | | | |
| | 妻 | 男 性 女 性 | 2 2 6 3 | 1 2 1 1 | 2 1 23 8 | 2 6 23 6 | 6 10 1 2 | 5 11 1 1 | 18 26 55 21 | | | | | | | |
| | 小 計 | | 8 5 | 2 3 | 26 10 | 26 7 | 10 16 | 10 17 | 82 58 | | | | | | | |
| 乳牛 | 夫 | 男 性 女 性 | 3 5 2 | 3 2 | 8 | 13 1 | 2 33 | 5 23 | 34 63 3 0 | | | | | | | |
| | 妻 | 男 性 女 性 | | | | | | | 0 0 0 0 | | | | | | | |
| | 小 計 | | 5 5 | 3 2 | 8 0 | 14 0 | 2 33 | 5 23 | 37 63 | | | | | | | |
| 合 計 | | | 16 12 | 7 5 | 57 20 | 49 19 | 20 50 | 24 54 | 173 160 | | | | | | | |

(注) 取引対象・形態ごとに最新のものから遡る形で、16世帯の夫・妻が取引を過去3回まで回顧した結果に基づく。

(出所) 2000年8月の筆者調査による。

(1) 性的役割分担、現金介入性、親族選択性

さて、ここでは物々交換を除く取引を集計した表6に基づき、以下のよう
な手順にしたがって主要な取引回路を認定していく。まず、飼葉、牛乳、乳
牛という取引対象ごとに、性別による4種の取引、すなわち、夫が取引主体
となって男性を相手とする、あるいは妻が主体となって女性を相手とする同
性間取引2種と、妻あるいは夫が異性を相手として行う異性間取引2種の総
件数を比較し、これらのうち多いものをその取引対象についての主要な取引

回路とみなす。次に、主要な取引回路のなかで最も件数の多い取引形態が、現金不在取引（貸借、受委託、贈答）と現金介在取引（売買）のいずれであるかを見極める。そして、その取引の相手として選ばれた人物として、親族の方が非親族よりも顕著に多ければ親族選択的、少なければ非親族選択的な回路であるとみなす。これに加えて、上で確認したように現金不在取引と介在取引における平均取引数量に大きな差があることを想起しつつ、各回路の特徴づけを行う。

ここでいう親族の範囲は、同じ父系リネージに属する者、婚出した女性親族、そして婚入した妻の姻族を含めたものである。回路認定に入る前に、対親族取引の割合を概観しておく、飼葉の場合は58%、牛乳では59%、乳牛では37%、そして物々交換の場合は41%であった。また、どの取引対象についても夫方親族との取引の比重が大きい。すなわち、物々交換を除く取引の場合、夫方親族、妻方親族、そして子どもに対する取引の件数は、飼葉についてはそれぞれ34、12、8、牛乳については39、24、19、そして乳牛については22、6、9であった。また、物々交換については、夫方親族との取引件数が12、妻方親族とのそれは1であった。なお、図5において確認したように、ンコアサクヤ村区は、部分的に姻族関係で結ばれた複数の父系リネージから構成されており、乳牛飼養に関わる取引の相手として村区内から親族、非親族の両方を選択しうる条件にある。

まず、取引対象が飼葉の場合の回路認定である。表6において取引件数が最も多いのは、①夫の同性間取引回路(41件)であり、そこでは親族選択性が明瞭でない現金不在取引と、非親族選択的な現金介在取引とが件数のうえでほぼ拮抗している。すなわち、平均取引数量が売買に比べて少ない贈答にあたっては、親族であるか否かによって相手を明瞭に選択することはなく、取引は必要な世帯に対して自給補完的な範囲で行われている。他方、飼葉取引がより大量になされる売買の場合には、非親族を相手に選ぶ傾向が強まっている。飼葉について次に取引件数が多いのは、②妻の同性間取引回路(27件)であり、この場合は平均取引数量が少ない現金不在取引における親族選択的

な取引が中心となっている。以上のほか、妻の異性間取引(22件)も存在しており、これはやや親族選択的な現金不在取引と、同じく親族選択的な現金介在取引からなる。しかし、両取引の件数は少ないので、これを主要な回路とは考えない。なお、夫の異性間取引の例は僅少であり、反復的な回路を構成しているとはみなしがたい。

次に、牛乳が取引される場合を検討しよう。牛乳の処分権は、明らかに妻に帰属している。件数最多なのは、③妻の同性間取引回路(76件)であって、明瞭に親族選択的な現金不在取引からなっている。この取引は、平均取引数量も少ない。次いで、④妻の異性間取引回路(44件)が認められ、これは非親族選択的な現金介在取引が中心であり、さらに親族選択性が明瞭でない若干の現金不在取引がともなっている。飼葉取引と同様に、牛乳についても、平均取引数量が多い現金介在取引においては取引相手の決定において非親族選択的となる傾向が現れている。

牛乳の場合は、売買のほとんどが集出荷者・小店舗との取引であり、しかも1件当たりの取引数量が大きい。ただし、親族相手の20件の売買のなかで、17件が牛乳集出荷者・小店舗との取引であるのに対して、非親族相手の取引においては33件の売買中、28件が牛乳集出荷者・小店舗との取引であった。とくに売却の場合には、決まった集出荷者に対して相当の期間継続して取引しつづけることが多く、総売却量は大きくなる。しかも、集出荷者から出荷小農への牛乳代金の支払いは、月極で行われることが多い。こうした状況においては、売却相手が親族であって何らかの理由により代金を支払わない場合、それを容認せざるをえなくなって売却が無償贈与に転化してしまわないともかぎらない。こうした取引リスクを回避するために、取引相手には非親族を選択して、代金不払いの損害を早い段階で最低限に抑えようとする人がより多くなるのではないだろうか。代金を支払わない非親族との取引を断った事例を回顧した回答者もあり、そうした問題に直面した場合の処理のしやすさを考えて、親族を避けている人が多いと考えうる。なお、他に件数がより少なく親族選択性が不明瞭で現金介在取引に偏った夫の同性間取引

(20件)が見いだされ、また夫の異性間取引は皆無であった。

最後に、乳牛をめぐる取引については、ほぼすべてが⑤夫の同性間取引回路(97件)であり、これは、親族を主な相手とする現金不在取引と、多数の非親族選択的な現金介在取引からなっている。乳牛の所有者は、ほとんどの場合男性、夫である。ただし、乳牛の場合、贈答のほとんどは父から息子への生前贈与であり、非親族との間にこれに相当する現象はありえない。すなわち、この現金不在回路は父系親族関係そのものである。また、非親族相手の取引の大部分を占める売買は、次節で確認するように、その多くが村区とその周辺には居住していない域外家畜商人を相手とするものである。これは、メル山斜面地域の局地的家畜市場やダルエスサラームなどの遠隔市場に親族ネットワークを通して関わる村区民が少ないことを反映している。したがって、この現金介在回路においては取引相手を親族か否かによって選択する余地が相対的に小さい状態にある。

以上のようにして、①飼葉についての夫の同性間取引回路、②飼葉についての妻の同性間取引回路、③牛乳についての妻の同性間取引回路、④牛乳についての妻の異性間取引回路、そして⑤乳牛についての夫の同性間取引回路が、乳牛飼養をめぐる主要な回路として認定された⁽¹¹⁾。このような主体別・相手別の取引回路は、取引件数は少ないものの、物々交換においても同様に認めることができる(表5)。すなわち、牛乳と飼葉の間で交換がなされる場合には妻の異性間取引が卓越し、乳牛に関わる取引においては夫の同性間取引のみとなっている。しかし、これらは取引件数が少ないので反復的な回路を構成しているとはみなさない。

実態は将来の家計調査にまたなければならないが、一般に、メル人小農世帯において、妻の家計は夫のそれとは独立しており、食糧自給と農畜産物の売買に関わっているといわれる。1件当たりの取引数量は少ないものの、妻が飼葉の贈答に強く傾斜している反面、飼葉を売却したり、あるいは牛乳をめぐる売買をかなりの程度管理していることからわかるように、妻にも現金が流れており、妻の会計において現金不在取引と現金介在取引とが接続し得

る。これによって、妻は外生的なインフレーション圧力が加わって現金不足に陥ったときにも世帯自給を維持するオプションを、さらには化粧・美容など他用途支払いのために現金を節約する戦略を手に行っている。他方、夫の家計は家畜売買のほか、コーヒー・材木の販売、家屋建設、衣類、子弟の学費、交通費、冠婚葬祭に関わる諸費用など、さまざまな現金介在取引を分担する。飼葉については、妻の家計が苦しい場合にのみ、夫が資金を持ち出して購入するのが筋であるという考え方が、男性の間には存在している。

(2) 取引空間と村区内リネージ間取引

以上のような取引回路が展開している空間の広狭については、どのような傾向を読み取ることができるだろうか(表7)。村区内に居住する相手との取引の比率は、飼葉で62%、牛乳で52%、乳牛で26%であった。これに近隣村区・村に住む相手との取引を加えると、飼葉は92%、牛乳は92%、乳牛は45%となる。また、物々交換の村区内取引比率は41%、これに近傍地域も含めると81%である(表5)。このようにして、飼葉と牛乳をめぐる取引回路の①から④は、村区とその近傍地域内に大部分が収まることがわかる。とくに、飼葉取引の相手として低地村居住者が選ばれた事例は皆無であった。斜面上部に位置するンコアサクヤ村区では、山麓や低地との間に飼葉調達のための集落間連関はほとんどなく、乳牛舎飼いの導入は第2節で指摘した飼葉の垂直移動をとまなっていない。

牛乳も近隣で取引が完結している。しかし、次節で触れるように、これにはアルーシャ市の消費者に対して牛乳を集出荷する近隣小農との取引が多数含まれており、妻たちの回路はこうした集出荷者を通して外部につながっている。他方、乳牛取引の多くは近傍地域以外に居住する家畜商人を相手とする売却である。親族ネットワークでつながる北斜面居住者との間でなされたものは8例にすぎず、そのいずれもが受委託以外の一過性の取引であった。一定期間継続する受委託関係は、山腹においては村区近傍居住者との間に限られている⁽¹²⁾。

表7 乳牛飼養をめぐる取引の空間
(物々交換を除く。ソングロ村ンコアサクヤ村区)

| 取引 対象 | 取引相手の 居住地 | 取 引 形 態 (件数) | | | | | | | | | | 合 計 | |
|----------|--------------|--------------|-----|-------|-----|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| | | 貸出・委託 | | 借入・受託 | | 無償贈与 | | 無償受領 | | 売 却 | | 購 入 | |
| | | 親族 | 非親族 | 親族 | 非親族 | 親族 | 非親族 | 親族 | 非親族 | 親族 | 非親族 | 親族 | 非親族 |
| 飼葉 | 村 区 内 | 1 | 2 | 2 | | 14 | 5 | 8 | 8 | 3 | | 6 | 9 |
| | 隣接村区・村 | 2 | | | | 9 | 5 | 1 | 3 | 3 | | 1 | 4 |
| | そ の 他 | | | | | | | | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 |
| | 小 計 | 3 | 2 | 2 | 0 | 23 | 10 | 9 | 12 | 8 | 1 | 9 | 14 |
| 牛乳 | 村 区 内 | 3 | 2 | 2 | 2 | 20 | 5 | 17 | 5 | 4 | 5 | 5 | 3 |
| | 近隣村区・村 | 4 | 3 | | 1 | 3 | 5 | 3 | 2 | 6 | 11 | 5 | 13 |
| | そ の 他 | 1 | | | | 3 | | 6 | | | | 1 | |
| | 小 計 | 8 | 5 | 2 | 3 | 26 | 10 | 26 | 7 | 10 | 16 | 10 | 17 |
| 乳牛 | 村 区 内 | 3 | 1 | 2 | | 7 | | 7 | | | 1 | 4 | 1 |
| | 近隣村区・村 | 1 | 4 | 1 | | 1 | | | | 1 | 3 | 1 | 7 |
| | そ の 他 | 1 | | | 2 | | | 7 | | 1 | 29 | | 15 |
| | 小 計 | 5 | 5 | 3 | 2 | 8 | 0 | 14 | 0 | 2 | 33 | 5 | 23 |
| 合 計 | | 16 | 12 | 7 | 5 | 57 | 20 | 49 | 19 | 20 | 50 | 24 | 54 |
| | | | | | | | | | | | | 173 | 160 |

(注) 取引対象・形態ごとに最新のものから遡る形で、16世帯の夫・妻が取引を過去3回まで回顧した結果に基づく。

「近隣村区・村」とは、ソングロ村ンコアサクヤ村区に境界を接する村区・村をさす。

「その他」には、回答者が取引相手の居住地を知らなかった場合を含む。

(出所) 2000年8月の筆者調査による。

乳牛飼養をめぐる取引回路の検討を締めくくるにあたって、各種の取引が実際の親族ネットワークによって媒介される姿を確認しておきたい。対象とするのは、父系リネージの空間的配置(図5)を明らかにした村区内において16世帯の夫・妻が村区内居住者を相手として行った取引170件であり、そのうち飼葉取引は58件、牛乳取引は73件、乳牛取引は26件、物々交換は13件である。すでに明らかなように、村区内には飼葉と牛乳の取引回路が集中しており、そこでは親族選択的な取引と非親族選択的な取引という相反する力が同時に作用している。しかし、検討範囲を村区内に絞り込む結果として取引事例の件数が半減し、これをさらに取引回路別に分解して個々の力の働き方を

把握することは難しくなる。したがって、以下では全170件をそのまま扱うにとどめる。

表8は、これら170件の取引について、回答者とその取引相手を父系リネージ別にまとめたのち、リネージ間取引行列として集計したものである。回答世帯数と回答された取引件数にはリネージごとにばらつきがあるので、リネージ内取引の多さ、すなわち取引が自己の所属するリネージに集中しているのかどうかについては、比率を用いて検討すべきである。表8では対角要素がリネージ内取引の多さを示しており、その比率はリネージAY2, M, N2を除いてほぼ5割以上である。また、婚出して他リネージに属する夫のクランに入った娘・姉妹などとの取引や、婚入してきた妻の出身リネージとの取引も対親族取引とみなせば、その比率はリネージAY2を除いて6割以上となる。こうして、対象世帯の多くについては、親族以外の村区民を選択できるにもかかわらず、その内部に村区内取引の主要な部分を含ませているといえることができる。これには、各リネージが空間的に凝集した存在であって、リネージ内取引の方がリネージ間取引よりも行いやすいという理由も考えられるが、その場合には平均取引数量が少なく親族選択的な現金不在取引が中心となる(表7)。

個別にみていくと、対親族取引の割合が小さいAY2は2世帯からなっており(図5)、取引相手となりうる親族の人数も他のリネージに比べて少ないので、対親族取引の割合も小さいものと考えられる。他方、姻族関係を結んでいる二つのンコ・クラン(N1, N2)の間にはクラン内リネージ間取引を認めることができる(表8)。しかし、アヨ・クラン(AY1, AY2)やパランジョ・クラン(P1, P2)については、クラン内リネージ間取引の事例が回答されなかった。近隣に同一クランの屋敷地があるサラキキャ・クラン(S)についても同様である。回答世帯が少ないためにこのような結果となった可能性があるとはいえ、同一クランに属し、空間的に近接しているリネージの間取引がみられるとはかぎらないといえよう。なお、リネージAY1は一つの屋敷地に複数の世帯が居住している例であり、その世帯間での取引が卓越している。

表8 乳牛飼養をめぐるリネージ間取引行列 (ソングロ村コンコアサクヤ村区内の170事例)

| 回答世帯の 属するリネージ (回答世帯数) | 取引相手の属するリネージ | | | | | | | | | | 合 計 (%, 件数) | 対親族取 引の比率 (%) | 村区内取 引の比率 (%) |
|-----------------------------|--------------|--------------|-----------|--------------|--------------|-------------|------------|--------------|--------------|--------------|-------------------|---------------------|---------------------|
| | AY1 | AY2 | M | N1 | N2 | P1 | P2 | S | 他 | 不明 | | | |
| AY1(1) | 90.9 10 | | | | | | | | | 9.1 1 | 100.0 11 | 90.9 | 37.9 |
| AY2(1) | | 12.5 1 | | 37.5 3 | 25.0 2(2) | | 12.5 1 | | | 12.5 1 | 100.0 8 | 37.5 | 28.6 |
| M(1) | | | 31.8 7 | 22.7 5(5) | | | | 13.6 3(2) | 31.8 7 | | 100.0 22 | 63.6 | 52.4 |
| N1(4) | | 2.4 1 | | 48.8 20 | 14.6 6(3) | 4.9 2(1) | | | 17.1 7(2) | 12.2 5(2) | 100.0 41 | 68.3 | 53.9 |
| N2(1) | | 33.3 2(2) | | 50.0 3(2) | | | | 16.7 1 | | | 100.0 6 | 66.7 | 25.0 |
| P1(1) | 37.5 3 | | | 12.5 1(1) | | 50.0 4 | | | | | 100.0 8 | 62.5 | 40.0 |
| P2(4) | | 2.7 1 | | 5.4 2(1) | 8.1 3 | | 59.5 22 | | 8.1 3(1) | 16.2 6 | 100.0 37 | 64.9 | 48.7 |
| S(3) | 2.7 1 | | 5.4 2 | 2.7 1(1) | 2.7 1 | 5.4 2(1) | 2.7 1 | 56.8 21 | 5.4 2(1) | 16.2 6(2) | 100.0 37 | 70.3 | 52.9 |

(注) 取引対象・形態ごとに最新のものから遡る形で、16世帯の夫・妻が取引を過去3回まで回顧した結果に基づく。

各リネージの英数字名は、図5中に示したものに等しい。

上段の数字はパーセント、下段の数字は件数である。下段の括弧内の数字は、当該取引件数のうち回答者の属するリネージ以外の親族集団に属している親族を相手とする取引の件数を示す(すなわち、父系リネージから嫁出した女性を、そして妻の出身リネージの構成員を相手とする取引。0でない場合のみ記入)。「対親族取引の比率」は、これらの件数を所属リネージ構成員との取引の件数に加えて算出したものである。

(出所) 2000年8月の筆者調査による。

第4節 小農による牛乳の生産流通と家内加工の実態

以上、メル山の山腹上部集落において乳牛飼養をめぐる形成されてきた取引回路がもつ特徴を明らかにしてきた。それでは、経済自由化という近年の政治経済的変動に対応して登場してきた牛乳家内加工は、これらの回路に対してどのような関係にあるのだろうか。本節では、前節で認定された取引回路、とくに牛乳と飼葉をめぐる回路と牛乳家内加工の関係について検討していく。

1. 集出荷小農と生産規模

牛乳は、冷蔵と迅速な加工を要する生産物だが、小農が担う零細な流通経路はそうした手順を踏まない場合がほとんどである。このため、牛乳は小農から消費者へと手速く流される必要があり、牛乳集出荷者は生産者と消費者をあらかじめ確保することになる。主な得意先は都市の個人消費者と飲食店だが、後者の場合には、その経営者が農村の自己所有地で乳牛を飼養して牛乳を自ら調達することもある。ンコアサクヤ村区の場合、こうした集出荷活動に従事しているのは村区内あるいはその近隣に居住する者であり、この小農集出荷者のほかに、外部から買い付けに入る業者は存在しない。アルーシャ市内にプラントをもつ民間乳業会社も、ソングロなどの山腹上部村を牛乳の集荷圏内に含めていない。その理由には、輸送費がかさむこと、降雨時には自動車による到達が不可能となることに加えて、乳質の問題があるという。すでに明らかにしたように、上部地域では低地からの乾燥飼葉の搬入が少ない分、域内で調達した未乾燥状態の飼葉を使う比率が高く、牛乳中の乳脂肪分が相対的に低いとされている。乳業会社は、乾燥飼葉の比率が高くて乳脂肪分の多い牛乳を調達するためにも、市内のプラントに近接する山麓村を中心とした集荷を行うことになる⁽¹³⁾。

小農によって生産された牛乳商品の流れは、前節で明らかにした④妻の異性間取引回路によって支えられている。この回路の全体像を把握するために、男性小農集出荷者の活動実態を素描する。ンコアサクヤ村区の16世帯が牛乳売却相手として回答した人物から一時的購入者と小店舗経営者を除いた残りは11名程度であり、彼らが村区とその周辺で牛乳集出荷活動に恒常的に携わっている。このうち、ソングロ村ンクウェラリ (Nkwerari) 村区に居住する小農集出荷者Aを取り上げて、都市消費者へとつながる零細な流通経路をたどってみる。32歳のこの男性は、1985年にある先行集出荷者のもとで活動を始めた。現在では仕事の内容を習得して独立しており、労働者を1人雇っている。彼はまた、1994年のコーヒー流通自由化後、コーヒー買い付け企業の代理業も行っている。

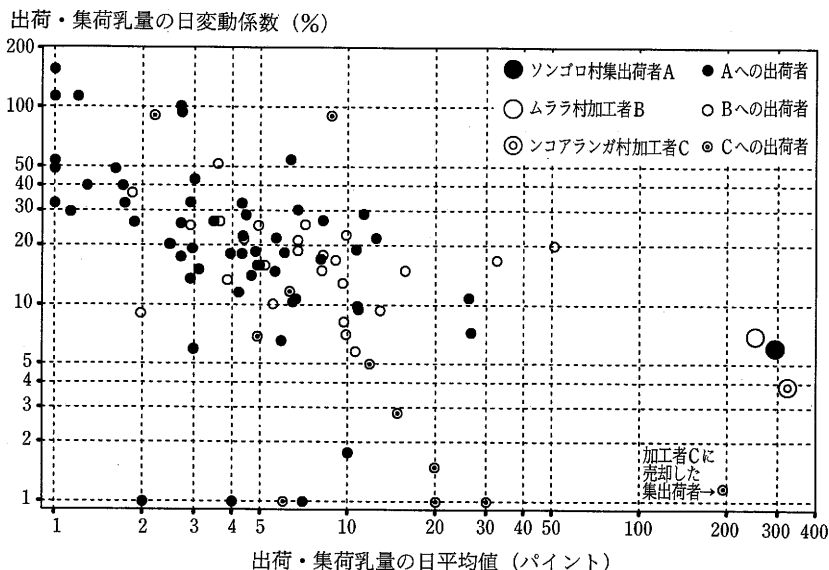
各小農世帯においては、搾乳は通常朝夕2回行われるが、販売にまわすのは朝の分であり、夕方の分は自家消費されることが多い。集出荷者Aの労働者は周辺の契約世帯を週7日、毎朝訪問し、ポリタンク数個に牛乳を集めていく。2000年6月には59戸、7月には56戸の世帯が集荷の対象となっていた。前節で明らかにしたとおり、取引相手は女性である。集荷には一輪の手押し車が用いられており、これによって輸送することが可能な最大の量を確保する程度の世帯数をカバーしていると考えられる。集荷は、小径や、雨季には自動車の通行が困難となる未舗装路を経由してなされる。計量単位はポイントであり、2000年8月現在、1ポイントを90タンザニア・シリング (以下、シリングと略記) で買い取っていた。村から斜面を下る途中に位置するンコアラング病院までは、牛乳を手押し車で降ろす。労働者の担当はここまでである。以下は、幹線道路までの枝道、アルーシャ市街までの幹線道路とも舗装されており、乗合タクシーが運行しているので、これを使って集出荷者A本人が牛乳をアルーシャ市まで運ぶ。顧客はすべて個人であり、宿泊施設や飲食店との取引関係はない。この集出荷者は、注文を受けている45ほどの非農家世帯に対してそれぞれ6～16ポイント、1ポイント120シリングで納入しており、輸送経費などを差し引く前の1ポイント当たりの粗収入は30シリングと

なる。アルーシャ市での平均取引価格は、近年1リットル(2パイント)につき280シリング(1998年)から275シリング(1999年)の水準にあるが(Tanzania [2000a]), ソンゴロ村からの出荷品はこれよりも若干廉価であるといえよう⁽¹⁴⁾。

ンコアサクヤ村区での牛乳買取価格については、1パイント当たり90シリングという上の例だけでなく、100シリングという例もみられるので、買い手独占のない牛乳買い付け市場が成立しているようにもみえるが、月極支払いを履行しない集出荷者への販売を取りやめるとするような場合を除いて、生産者である女性の側で売り渡し相手を頻繁に変えることはないようである。しかしながら、生産者は相手の自由な選択を制限されているわけでもない。配送を終えた集出荷者が、アルーシャ市内で配合飼料(ブンバ)を買い付けて持ち帰り、販売することもあるが、こうした乳牛飼養における投入財の小農に対する付け売りや、それによって形成された負債を解消するために集出荷者との取引関係が固定化し従属化していくような例は観察されなかった。

さて、ここで女性たちがどのくらいの乳量を販売しているのか、そしてその量はどのくらい安定しているのかを確認しておきたい。彼女らが牛乳を売却する相手としては、小農集出荷者に加えて、近年新たに登場してきた牛乳家内加工者も存在する。ンクウェラリ村区の集出荷者A、ムララ村メト(Meto)村区の集荷加工世帯B、そしてンコアラング村テレンボ(Terembo)村区の集荷加工世帯Cが、2000年7月の1カ月に周辺の小農から購入した乳量の記録によれば、合計94人が合わせて2万6741パイント、1日1世帯平均で9.2パイントの牛乳を販売していた。一つの小農世帯が同日に複数の集出荷者・加工者に牛乳を販売する可能性を否定することはできない。したがって、1世帯の平均販売量は、この数字を上回るかもしれないが、その可能性は高くない。ンコアサクヤ村区の対象16世帯の場合、1日の搾乳量は、平均13パイント(最小2パイント、最大は売却分20パイントに不明の自家消費分を加えた量)であった。このうち、どの世帯についても平均8パイント(最小1、最大20パイント)程度がすべて一集出荷者に売却されており、このように少ない販売量

図6 対象地域における牛乳集出荷量の分布 (2000年7月1日～31日)



(注) 両軸とも1未満の値を1に変換したのち対数グラフ表示した。

(出所) 筆者の調査による。

をさらに小分けして異なる集出荷者に販売することはほとんどないと考えるのが自然であろう。なお、この16世帯の1日の自家消費量は平均5パイント(最小1, 最大10パイント)程度であり、世帯規模は平均6.9人(最小4, 最大12人)であった。

図6は上述の94人の牛乳出荷量と、3人の集出荷者および集荷加工者の集荷量の、それぞれ日平均値と日変動係数の分布を示したものである。日平均出荷量の多い出荷者、とくに10パイントを超える者ほど、変動係数、すなわち出荷量の日平均値に対する標準偏差の割合が小さくなっており、それだけ同一の集出荷者・加工者に対する出荷量が安定していることがわかる。これに対して、日平均出荷量が少ない出荷者ほど変動係数が大きくなり、日によっては全く販売がなされない場合も多くなる。

1日の販売量は零細であるものの、常に上昇してきたアルーシャ市での牛乳価格に支えられた牛乳販売が世帯収入に占める意義は大きい。この点を、ンコアサクヤ村区において乳牛1頭を飼養している世帯の一例に即して検討してみる。この場合は、配合飼料を1カ月間で60キログラム与えており、これに7500シリングを支出している。その結果として1日平均6パイント(単価90シリング)の牛乳を得てこれを1カ月間出荷すると、売上高は1万6200シリングとなる。2頭を飼養するもう一つの世帯の場合、1カ月で配合飼料160キログラム分の2万シリングを費やして、1日平均20パイント(単価100シリング)を出荷し、売り上げは1カ月間で6万シリングに達する計算となる。両世帯とも、労働力の雇い入れはなく、それぞれ1.5エーカー、3.25エーカーの土地から飼葉の多くを自己調達している。売上高から配合飼料代金を差し引いた残りは、それぞれ8700シリング、4万シリングとなる。これらの値から純益を導き出すことは、種付け料、薬剤や獣医サービスなどの費用、さらには乳牛買い換え費用を考慮する必要があるが、さらには泌乳期後半の搾乳量減少をも勘案しなければならない。ここではこれ以上の試算は慎むが、乳牛の健康状態が良好である場合には、牛乳販売は相当の純益をもたらさう。以上の試算に基づくと、これらの世帯が実現した1シーズンのコーヒー売上高は、牛乳販売による粗収入のおよそ4カ月から6カ月分に相当する計算となる⁽¹⁵⁾。すなわち、これらの世帯にとっては、牛乳販売から得られる1年間の収入が、国際市況に影響されて収入が上下する可能性のあるコーヒーのそれを上回る可能性があるのだ。これは、聞き取りで得た彼らの自己評価とも一致する。

以上のように、世帯当たりの平均飼養頭数が非常に零細な規模であれば(表2)、前節において確認したように、村区内の自己所有地から飼葉の大部分を調達でき、残りは村区内取引で工面すればすむ。そして、配合飼料費用その他を支出しても、収益が生じうる。これに対して、山腹上部集落で仮に頭数を増やそうとすると、配合飼料だけでなく飼葉の域外調達、とくに低地からの搬入が必要となると考えられる。輸送に用いる自動車の借用代は車種と輸

送距離に応じて変化するが、1度につきほぼ4000～2万シリングの間に収まる。飼葉の域外調達を行う場合、この輸送費用分が加わって、牛乳販売の収益を減らす可能性があるのだ。これが低地からの飼葉搬入が行われない大きな理由であろう。現在の飼養頭数は、域外から飼葉を搬入しない場合の最大水準にあるともいえる。そして、域内の飼葉資源によっては養いきれない子ウシについては、それを未經産牛、あるいは食肉牛として売却する夫の同性間取引回路⑤が存在している。

しかしながら、仮に相当の純益が獲得されうるとしても、それがそのまま資産として蓄積されていくとはかぎらない。山腹上部集落においては、大雨季メイズ作が乳牛飼料生産の役割を果たしていることを思い出さなければならない。その結果として、多くの世帯が食用メイズを購入しているのである(表2)。1999年8月にンコアサクヤ村区の30世帯から得た回答によれば、過去1年の間に購入したメイズの量は、平均2.2袋(最小0, 最大7袋)であった。そして、2000年8月現在、アルーシャ市の屋外市場でのメイズ価格は、1袋80キログラム程度が5万4000シリング前後であった。したがって、牛乳販売の純益の相当分は、世帯の自給維持のために費やされていると考えるべきであろう。妻の異性間取引回路④は、域外に商品を出して域外から食糧を入れるという戦略を支えているのであり、市場に依存することなしには自給水準を維持できない構造が形成されているとみる必要があろう。

最後に、集出荷者、集荷加工者の側の日平均集荷量について確認しておく。まず集出荷者Aの場合は56人から290.9パイントを集めていた。他方、集荷加工世帯Bは26人から250.2パイント、集荷加工世帯Cは12人から321.5パイント(うち1例は別の集出荷者による日平均200パイント近くの納入)を、それぞれ買い入れていた。図6によれば、これら3者は、出荷量が毎日変動しうる複数の出荷者を供給元として確保することによって、変動係数10%未満の水準で安定した牛乳集荷を実現していることがわかる。

2. 牛乳家内加工と牛乳の取引回路

調査対象村区の周辺では、1990年代に入ってから牛乳家内加工が始まり、それまで集出荷者を通して都市に流れていた牛乳の一部が、こちらに分岐するようになっている。牛乳のチーズなどへの加工は、保存性を高め、重量・容積を大幅に縮減して輸送を容易にし、かつ高付加価値を与える作業であり、メル人小農社会にとっては生計多角化の一戦略となりうる経済活動である。上述したように飼養頭数が零細規模に落ちている山腹上部集落において、こうした乳製品の加工はどの程度、どのような取引回路に支えられて成立しており、またこれに着手しているのはどのような特徴をもった小農世帯なのだろうか。

調査対象地域においては、2000年8月現在、わずか4軒ではあるが、牛乳家内加工世帯を確認できた。いずれにおいても、加工と経営は妻の分担となっている。原料乳は、生産者から直接買い付ける場合と、間に小農集出荷者をおく場合とがある。後者の場合は既存の集出荷の流れの末端に接続した形となっているのに対して、前者の場合は、女性生産者と女性加工者の間での現金を介在させた同性間取引である。しかも、いずれの場合も間欠的ではなく一定期間にわたって続く結果、やり取りされる牛乳と現金とは相当量に達する。とくに直接買付は、現金不在取引が中心で親族選択的な同性間取引③でも、現金介在取引が多く非親族選択的な異性間取引④でもなく、これらの回路の外部でなされ始めた取引関係である。家内加工者への牛乳の分流は、既存の取引回路の単なる延長ではなく、女性が女性に大量販売するという点で、その性格自体が新しいものであると考える必要がある。

女性たちが家内製造しているチーズは、全乳中のタンパク質を輸入レンネット（凝乳酵素）で凝固させ、圧搾・加塩ののち、熟成させたものである。彼女らはこれをゴーダ・チーズとして販売している。また、遠心分離機をもつ加工者の場合、注文に合わせて全乳中の脂質をあらかじめクリームとして

分離し、これからバターを製造することもある。チーズのみの場合、20パイントの牛乳から1キログラムが得られ、並行してバターを作る場合は同量の牛乳から約750グラムのチーズと500グラムのバターができる。ンコアサクヤ村区近傍では、先に集荷乳量を検討したムララ村の世帯Bとンコアランガ村の世帯Cが中心的な加工者であり、その夫たちはいずれも後述する酪農家組織の中心人物でもある。また、いずれにおいても加工作業には数名の汎用労働者が関わっており、農村零細企業活動の一つとってよからう。周辺小農から牛乳1パイントを100シリングで買い入れ、これに自家飼養乳牛からの搾乳分を加えて、世帯Bは1日平均12キログラム程度、世帯Cは16キログラムほどの乳製品（2000年7月、チーズ換算）を製造している。両世帯とも、自家飼養している乳牛の排泄物から発生させたバイオガスの火力を用いて加工しており、また世帯Bについてはこれによって作動する冷蔵庫を所有している。完成品は、チーズ、バターとも1キログラム4000シリングで販売する。したがって、牛乳購入費用のみを差し引いた粗収入は、1キログラム当たり2000シリングとなる。納入先はアルーシャ市のスーパーマーケットや観光ホテルであり、販路はキリマンジャロ州のモシ（Moshi）市に及ぶこともある。注文は、毎年大雨季を避けた6月から翌年3月にかけての観光シーズンに多く受ける。第1節で触れたように、彼らは経済自由化のなかで膨張してきた外国人観光客需要に対応しているのである。

世帯B、Cが牛乳家内加工を始めるに至った背景には、共通して公共部門における農外就労の経験がある。まず世帯Bの場合だが、長男である47歳の夫は、国家食糧公社（National Food Corporation: NAFCO）に1980年代初頭から勤務して会計を担当しており、アルーシャ州ハナン（Hanang）県の牧民バラバイグ（Barabaig）の土地で行われてきたカナダ政府援助による大規模小麦栽培プロジェクト（Lane [1996]）に関係している。乳製品加工の開始年は1990年であり、この世帯がこの地域における家内加工の先駆者である。開始のきっかけは、1980年代後半にアルーシャ市近郊に拠点を置く農業機械化・農村技術センター（Centre for Agricultural Mechanisation and Rural

Technology: CAMARTEC) のバイオガス普及プロジェクトの受益者となった際に、指導役のドイツ人からチーズ製造法を教えられたことにある。1988年から1991年にかけて、夫が技術訓練プログラムを受けにカナダに出向いている間に、自宅敷地内にコンクリート・ブロック造りの加工場を建設し、ムララ村の小学校教師である妻が、夫の弟とともに数名の汎用労働者を監督しながら製造を始めた。妻は経営者の肩書で名刺を作成して自ら製品納入にあっている。夫は受注の一助として携帯電話を用いており、これは山腹の村区内でも受信可能である。商品には商標をあしらった色刷りのラベルを貼りつけている。

慣習法による土地保有のもとで土地を担保にした銀行融資を受けることができないため、コンクリート製のバイオガス・プラントから乳製品の加工場・設備まで、世帯Bはすべて自己資金によって建設・購入した。資金は、結婚時に夫が父から贈与された乳牛に始まる搾乳、子ウシの販売、配合飼料販売、コーヒー販売、NAFCOからの給料、ハナン県に借りている100エーカーほどの耕地で栽培している小麦のビール会社への販売などから捻出されており、さらに夫がカナダでの研修中に形成した貯蓄で最初の自家用車を購入している。その後は、チーズ製造販売からの利益を再投資しつつ、コンクリート・ブロック造りで窓ガラスの入った2階家を建設するに至っている。メル山山腹の小農の多くがコンクリート床の木造平屋で寝起きしているのに対して、世帯Bの家屋は著しく多額の費用を要する造りであり、そのことは外観からも容易に判断できる。

世帯Bに始まる乳製品加工は、世帯Cでも採用された。52歳の夫は三男であり、かつてムワンザ (Mwanza) 州やシンギダ (Singida) 州などで畜産官 (bwana mifugo) として勤務した経歴をもっており、妻も元学校教師である。1992年に妻が周辺小農から牛乳を購入してチーズの生産を開始し、1994年からはそれまで農外就労の都合上飼養していなかった乳牛を自ら導入し、自家搾乳分も合わせて加工している。やはりバイオガス・プラントを導入しており、自家用車は所有していないが、家屋はコンクリート・ブロック造りであ

る。チーズの生産は2人の汎用労働者を使用しつつこの家屋の内部で行っており、独立の加工場を建てる段階には達していない。この世帯はコーヒーの木を所有していないが、1999年より他の小農世帯に先立ってキノコ栽培を始めている。チーズと同様に、これも増加してきた観光客需要をねらったものであり、多角化の一側面であるといえよう。

このように、世帯B、Cとも夫妻が公共部門の職員として就業し、さらに収入機会を多方面に確保するなかで、乳製品加工を開始するための資金が蓄積されてきたと考えられる。また、そうした経歴が、加工の、そして加工のための条件整備に必要な知識と技術に接することを容易にし、また先行者の加工例に接してそれを採用することを促してきたと考えられる。これは、東アフリカの零細企業研究でも指摘されてきた、一個人がフォーマル・セクター就労とインフォーマル・セクター就労の間を往復する動きの一例といえよう（上田 [1997]）。いずれの世帯においても牛乳家内加工は妻が管轄する零細企業活動だが、これは自分だけでなく、夫の他部門での就業経験によって条件づけられ、また促進されているといえよう。

牛乳家内加工を成立させている牛乳の取引関係は、前節でみたように牛乳をめぐる既存の取引回路の大部分が女性間で形成されており、かつその多くが世帯自給の範囲に閉じていると考えられるのとは対照的である。すなわち、牛乳家内加工においては、農外就労という全く別の経路から資金が投入され、これによって自給水準を超える生産のための新しい形の取引が展開しているといえよう。さらに、牛乳をめぐる管轄権はこうした家内加工世帯においても依然として女性の手にあるものの、そのことの意味は、既存の性的役割分担のもとで夫と妻の家計が程度の差こそあれ独立していると考えられる非加工世帯の場合とは大きく異なっている。すなわち、妻の管轄下におかれてきた牛乳によるいっそうの現金稼得を目的として、夫が妻の活動に対して投資をしているのである。夫婦間の現金の流れと管理の実態を確認していないため結論を急ぐことは慎むが、この動きを指して女性の分担領域が狭隘化して彼女らの自律性が縮小しつつあると論ずることが可能かもしれない。しかし、

これが夫婦の現金収支を対等に近い形で一体化していく過程である可能性も否定できない。

このような牛乳家内加工は、管見のかぎり、アケリ村のようなアルーシャ市近郊の山麓村では認めることができなかったし、アケリ村民も彼らの周辺でそうした活動を行っている者はいないと述べている。それでは、牛乳家内加工はなぜ山腹上部集落において形成されてきたのだろうか。これについては、二つの理由を指摘することができる。

第1の理由として、山腹の立地条件を指摘しておく。ソングロ村周辺の山腹地域が乳業企業の牛乳集荷圏外におかれている理由の一つは、集荷費用がかさむことにあった。これは小農集出荷者にとっても同じことであり、都市に近い村よりも牛乳販売の利益を圧縮しなければ消費者を失う恐れがある。さらに、手押し車から乗合自動車に積み換えての輸送によつては、一度に消費地へ運びうる乳量に限界がある。その結果、1回の配送から獲得される利益にも自ずと上限がある。このような条件は、より軽量で付加価値の高い加工品を山腹で生産する誘因となろう。

第2に、ソングロ村周辺の山腹地域は乳業企業との競争圏外にあり、加工者は小農集出荷者と同水準に買い付け価格を設定すれば、原料乳を確保することができる。これに対して、たとえばアケリ村は、1998年よりアルーシャ市にある旧タンザニア乳業会社(TDL)のプラントを利用して操業を始めた民間会社の牛乳集荷圏内にある。この民間企業は毎朝自動車で村内を巡回し、1パイントを100シリングで買い取っており、また夕刻の集荷分については村内の冷蔵施設で翌朝まで保存している。この企業は代金の月極支払いが円滑でない場合があり、これに不満をもつ生産者は80シリングで買い取る小農集出荷者に売却している。すなわち、この村では「フォーマル」企業と零細企業が牛乳買い付けをめぐる競争を展開している。こうした条件のもと牛乳家内加工を行うとすれば、牛乳確保において価格上昇圧力にさらされ、経営・操業にとってマイナスの要因となろう。

3. 牛乳家内加工と飼葉の流通経路

山腹上部集落の牛乳家内加工者たちは、牛乳の大部分を周辺小農世帯から調達する一方で、乳牛の自家飼養・搾乳も行っている。世帯Bの場合、5エーカーほどの土地を所有して5頭の乳牛から毎日40パイントの牛乳を搾乳しており、世帯Cは1エーカーの土地で2頭を搾乳中であつた。牛乳家内加工者にとって、自家飼養には、飲用乳、堆肥、そしてチーズ製造の熱源となるバイオガスの確保といった目的がある。これらに加えて、世帯Bでは、周辺小農からの牛乳供給量の不安定さを克服して受注した量の乳製品の製造を確実にするためとして、自家飼養頭数を増やして原料乳の50%近くを自己生産することを目標としている。ただし、図6でみたように、1カ月間のみのデータではあるが、世帯Bの集荷乳量はかなり安定していると認められる。したがって、牛乳原価を圧縮して販売競争を有利に展開すること、そして通常集荷量では対応できない注文を受けたときにその機会を逸しないために自己生産乳を多めに確保しておくことも、自家飼養を拡大する動機の一部であると考えられる。

両世帯とも、このような乳牛飼養において、飼葉の集落間調達、とくに低地からの調達に依存している。いずれも飼葉については自己調達分よりも購入分の方が多いと回答しており、とくに所有地面積の小さい世帯Bでは域外から搬入する飼葉商品が中心であるという。これは、ンコアサクヤ村区における飼葉取引が大部分村区周辺で完結していたこととは対照的である。世帯B、Cとも、狭域内に展開している飼葉の取引回路①や②では足りない部分を域外から購入しているといえ、飼葉調達の点でも、これらの世帯の活動は既存の取引回路の単純な延長上にはないと判断できる。

ところで、メル山南麓の低地において人間の食糧用に栽培されたメイズ・マメの茎葉が商品化し始めたのは、人口増加によって放牧地が十分に確保できなくなった1990年代以降のことらしい。アケリ村での聞き取り結果によれ

ば、これらの作物の茎葉を飼葉として供給している主な地域は、メイズ茎葉については標高1100メートル前後の山麓下部に位置するキカティティ (Kikatiiti) やンドゥルマ (Nduruma) などであり、マメ茎葉についてはより標高が下がりより乾燥した低地である。マメ茎葉の主要供給地としては、とくにキリマンジャロ国際空港に近いマルラ (Malula, 標高900メートル前後) がよく知られている。これらの地域は、アケリ村に対してのみならず、メル山斜面地域の各所に対して飼葉余剰を供給している。

低地の飼葉余剰が商品として取引される場合、それが最終消費地に近い山麓に点在する定期市でなされることは、ほとんどない。仮に生産者が定期市向けに見込み出荷をしたとしても、売却できなければ、輸送費用分の損失が出てしまう。このために取引の大部分は注文に基づいてなされており、ここに生産村と消費村とを取引情報で結ぶ仲介者が活躍する余地が生じ、またこの役割を親族ネットワークが担う可能性もでてくることになる⁽¹⁶⁾。

山麓のアケリ村での聞き取りによれば、低地に飼葉余剰が生じた場合、低地村民が収穫の終わった耕地の所在などについての情報を山麓・山腹の小農世帯に伝えに登ってくる。彼らは、必要に応じて飼葉輸送手段や刈り取り・運搬労働の手配も行い、往復の交通費と謝礼金を得て戻っていく。一度の訪問で複数の小農との間に取引を成立させた場合には、交通費と謝礼金も成約件数の分だけ受け取ることであり、収益が生じる。このような低地村の仲介者は、飼葉余剰を少量ずつ買い集めまとまった量にして販売することも、大生産者と山麓・山腹小農とを仲立ちすることもある。また、仲介者は山麓・山腹側からも現れうる。彼らが低地との間に親族ネットワークをもっている場合、これを通して低地の飼葉余剰を無償調達するのに並行して、山麓・山腹の近隣世帯に対して飼葉情報を伝えることがある。すなわち、低地村に飼葉を受け取りに行く際に、隣家から飼葉調達の依頼を受け、飼葉情報を持ち帰って薄謝を受け取る。さらに、その情報で成約した場合には、経費と謝礼を受け取る。こうした仲介者はいずれも小農であって、飼葉余剰が生じる季節に一時的にこうした活動に従事しているのであり、恒常的な商人ではない。

アケリ村の対象16世帯について世帯主の兄弟姉妹・親族の現住地、域外土地保有先と、メイズ・マメ茎葉の調達先となっている集落・地域との重なり合いを検討してみる(表9)。とくに、標高1100メートル以下の山麓低地や東麓に彼らの集落間親族ネットワークが延びており、そこに耕地が保有され、あるいはそこからの飼葉の調達がみられる。集落間調達の多くは非親族相手の取引によるものであって、低地の飼葉はかなり商品化している。しかし、親族ネットワークが取引を媒介する場合もみられ(9件)、これらのなかには無償取引や、低地の親族所有地において耕作を手伝って茎葉を得る取引が含まれている。さらに飼葉調達が親族からの借地、親族からの輸送用車両借用によって支えられている事例、親族仲介者による情報入手の事例も存在する。

これとは対照的に、山腹にあつて自家飼養規模を拡大しようとしている牛乳家内加工世帯は、集落間調達、とくに低地からの調達において親族ネットワークを利用していない。父系の近縁者について確認しておくと、ムララ村の世帯Bについては、夫の異母兄弟はキンゴリ方面の低地に転出しているが、彼らの生産するメイズやマメの茎葉は彼らの家畜によってほとんど消費しつくされており、また輸送するには遠くて費用がかかりすぎる。ンコアラング村の世帯Cについては、夫の兄弟はすべて村内に居住しており、低地のカランガイ(Karangai)村にオバが転出したものの、飼葉供給は受けていない。親族に頼る代わりに、世帯Bは、山麓村に住む非親族からメイズ茎葉などを、また低地における主な飼葉供給地であるマルラの非親族からマメの茎葉を購入して、自家用車で運搬している。世帯Cは、上部地域のソングロ村やウリショ村、さらには山麓のウサ・リバー(Usa River)や低地に近いキカティティの非親族からメイズ茎葉を、そしてマルラの大土地経営者からマメ茎葉を購入して、借用した車で持ち帰っている。どちらの世帯も、搬入した乾燥飼葉、そして配合飼料を、村区周辺で調達したバナナ茎葉などとともに用いている。両世帯とも、夫が飼葉調達に大きく関わっている。

牛乳家内加工において動く現金の量は、単なる牛乳生産・販売のそれに比べて格段に大きい。世帯Bは、2000年7月の1カ月間に買い入れた牛乳を用

表9 アケリ村マリンガ村区周辺・対象世帯の集落間親族ネットワーク

| 標高帯 | 兄弟姉妹・親族の現住村・地域および土地所有・借用先 | 兄 (人) | 姉 (人) | 妹 (人) | 他の親族 (人) | 山腹外部で の土地所有 (世帯) | 山腹外部で の土地借用 (世帯) | メイズ莖葉 調達先 (うち親族) (世帯) | マイズ莖葉 調達先 (うち親族) (世帯) |
|---------------------|---|----------|----------|----------|-------------|------------------------|------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 1700m | ンドンボ (Ndoombo) | 1 | 1 | | | | | 1 | |
| 1500m | ンジャニ (Ngyani) | | | 1 | | | | | |
| | アケリ (Akeri) | 33 | 13 | | | | | 1(1) | |
| 1400m | キムンド (Kimundo) | | 4 | | | | | | |
| | ンゴアンルア (Nkoanrua) | | 3 | | | | | 1 | |
| | パタンディ、ングルマ、スィンギスィ (Patandi, Nguruma, Sing'isi) | 5 | 11 | | | | | 3(2) | 1 |
| | サキラ (Sakila) | | 1 | 1 | | | | | |
| 1200-1300m | マジ・ヤ・チャイ (Maji ya Chai) | | 2 | | | | | | 1 |
| | ウサ・リバー (Usa River) | | | | | | | 3 | 1 |
| | キガディタイ (Kikatiti) | | | | | | | 2 | 2 |
| | ドウルタイ (Duluti) | | | | | | 1 | 1 | 1 |
| 1100m | マニレ (Manyire) | 1 | | | | 1 | | 2(1) | 2 |
| | ンドウルマ (Nduruma) | 2 | | | 1 | | | 1 | |
| | カラングアイ (Karangai) | 1 | | | | | | 4(1) | |
| 1100m未満 | マロロニ (Maroroni) | | 1 | | | | | | |
| | ムブグニ郡 (Mbuguni) | 1 | 4 | | 5 | 1 | 1 | 2(1) | |
| 東麓 (900-1300m) | キンゴリ郡 (King'ori) | 1 | | | 1 | 1 | 6 | 10(3) | 12(3) |
| | レグルキ郡 (Leguruki) | 2 | 1 | | 1 | | | | |
| 北山腹 (1400-1700m) | ンガレ・ナニユキ郡 (Ngare Nanyuki) | | | | 1 | | | | |
| | アルーシヤ州他県 | | | | 2 | | | | |
| | キリマンジャロ州 | | | 1 | | | | | |
| | 他州 | 4 | | | | | | | |
| | 不明 | | 1 | | | | | | |
| | 合計 | 51 | 44 | 12 | | 3 | 8 | 31(9) | 20(3) |

(注) 調査対象とした16世帯の夫は相互に兄弟関係にはないので、この表において兄弟姉妹の重複数定はない。

(出所) 2000年8月の筆者調査による。

いて、チーズ換算で390キログラムほどの在庫を形成したことになる。これが順調にさばけた場合、売上高は156万シリングほど、牛乳原価のみを差し引いた粗収入は78万シリングほどとなるはずである。また、世帯Cは、同期間にチーズ換算で500キログラムほど、売上見込み高にして199万シリングに及ぶ製品を生産したことになり、牛乳原価のみを差し引くと、100万シリング近くが残る計算となる。これらの金額からさらに先行投資分や諸経費を差し引かなければ純益は求められないが、零細な牛乳販売において動く金額とは桁が違うことだけは確かである。世帯Cの場合は、さらに夫婦でキノコ栽培を行い、これからも多額の収入を得ている⁽¹⁷⁾。

しかし、ンコアサクヤ村区とその周辺においては、世帯B、Cと並ぶ規模で乳製品加工を行っている小農は、他にはない。見いだしたのは、より小規模、不定期に生産している2例のみであった。両例とも、夫・妻ともに安定的で長期にわたる農外就労の経歴はない。まず、ソングロ村シャラ(Shara)村区の世帯Dでは、農耕・乳牛飼養に並行して、34歳の夫が乳牛売買の仲介を、妻がチーズ製造を行っている。妻は、「空き時間を有効に使うために」、アルーシャ市近郊の農業専門学校で製造法を習得して1999年からチーズを作り始めた。1カ月80キログラム程度の小規模生産であり、スーパーマーケットや観光客向けホテルに納入している。ムララ村キュウタ(Kyuta)村区の世帯Eでは、妻が近隣の女性4人とともにグループを組織してチーズ製造を行っている。牛乳は数世帯から1パイント110シリングとやや高めに買い入れ、加工したチーズは郵便で発注したホテルなどに対して1キログラム5000シリングと高めに販売している。この女性グループの他の構成員は、それぞれ牛乳の集荷、パン焼き、縫製、小店舗経営を分担している⁽¹⁸⁾。

ソングロ、ムララ、ンコアランガの一带では、1999年に生産者11人がまとまってメル酪農家協会(Meru Dairy Farmers' Association: MEDAFA)を発足させている。しかし、すでにみてきたように牛乳生産者は個々の集出荷者に販路を依存しており、生乳の共同出荷などのマーケティング活動は行っていないため、この組織の認知度は小農の間で決して高くない。世帯B、Cの夫

は、この協会のそれぞれ会長と会計を担当している。彼らによれば、人工受精の奨励、給餌法の改良、薬剤の供給などが協会の主な目的であって、世帯Bが配合した飼料を村区内の協会事務所で販売するなどしている段階である。こうした活動の背景には、産地間競争が激化することに対する危惧がある。カゲラ (Kagera) 州のブコバ (Bukoba) では牛乳1パイントが50シリングで売買されているといい、これはメル山周辺のほぼ半額であるし、乳牛飼養の先進地域であるキリマンジャロ州のモシ市周辺の地域でも、牛乳原価はより安い。会長らは、これらの地域で加工された廉価なチーズがアルーシャ市近辺の市場に流れ込んで販路を奪われることを懸念しており、協会の活動を通して乳質維持と搾乳量の増大、あるいは価格・費用の低下を促すことで、他地域に対抗しようとしている。

おわりに

メル人農村社会のなかに少数ではあるものの登場してきた牛乳家内加工は、タンザニアの経済自由化にともなって増加してきた外国人観光客の需要に対応した、新しい農村零細企業活動である。本章では、農畜産物を原材料として農村内で加工を行う、いわば前方連関形成の一例としての牛乳家内加工の実態と、それを成立させている基盤について考察してきた。第1節でそうした問題関心を提示し、第2節で調査対象集落を含むメル山斜面地域を概観したあと、第3節においては乳牛飼養をめぐる人々が形づくってきた取引回路の特徴を明らかにしようとした。タンザニアにおける牛乳の生産と流通の大部分は、国家に統制されることなく未組織小農によって担われてきた。牛乳家内加工について考察し、農村社会においてそれが占める位置、あるいはその意義を検討するためには、乳牛飼養にともなう取引の、「インフォーマル」で従来明らかにされてきたとはいいがたい実態を、まずもって知る必要があったのである。

第3節では、まず、親族ネットワークの空間的分布を、山腹上部地域のソングロ村ンコアサクヤ村区の内外について検討し、内部については複数のリネージがそれぞれ空間的に凝集している姿を、外部についてはメル山北斜面への連鎖的移住による親族ネットワークが形成されていることを明らかにした。つづいて、乳牛の分娩・泌乳サイクルと自家飲用乳確保の必要などを踏まえて、同村区の調査対象世帯が行ってきた飼葉、牛乳、乳牛をめぐる各種の現金不在・介在取引の論理を説明した。そして、どの取引慣行がメル人小農の間で規則性・傾向性をもって反復されているのかを、集計レベルにおいて検討した。飼葉取引の主要回路は、①親族選択性が明瞭でない現金不在取引と非親族選択的な現金介在取引からなる、夫の同性間取引回路、②親族選択的な現金不在取引が中心である、妻の同性間取引回路である。牛乳取引の主要回路は、③親族選択的な現金不在取引が支配的な、妻の同性間取引回路、④非親族選択的な現金介在取引を中心とした、妻の異性間取引回路であり、牛乳の処分権は多くの場合、妻に属していることが確認できる。そして、乳牛取引のほとんどは、⑤父系相続と非親族家畜商人への売却を内容とする夫の同性間取引回路を通してなされている。このうち、取引回路①～④は大部分が村区内に収まっており、とくに低地集落からの飼葉の調達にはメル山斜面の最上部集落ではほとんどみられず、親族ネットワークもそのために利用されることはない。また、村区内におけるリネージ内取引の実態について確認した。

メル山斜面地域においては、自由化以前より、小農集出荷者たちが④妻の異性間取引回路を利用して牛乳を買い集め、これをアルーシャ市の都市消費者に対して供給してきた。調査対象世帯は、飼葉の集落間調達にほとんど依存しておらず、飼葉は村区とその近傍に収まる取引回路①、②でまかなってきた。このため、第4節で示したように、飼養頭数と販売乳量は零細である。販売収入はコーヒーのそれに勝るとも劣らないが、そのかなりの部分は妻の会計の内部で食糧購入にまわされ、牛乳販売は多くの世帯にとって市場に依存しながら世帯自給を維持する構造の一部分となっていると考えられる。そ

して自家飲用乳の不足分や贈答用牛乳は、女性の間で取引回路③を通して補完・交換されてきたのである。

これに対して、第4節で検討した牛乳家内加工は、都市への牛乳流通を農村内部において分岐・滞留させ、高付加価値を与えたいうで、主として外国人観光客向けに出荷する作業である。山腹上部の地域は、他に先駆けてこのような活動を生み出す誘因をもっているといえる。それは、都市への輸送費用の相対的高さと輸送乳量の限界であり、また輸送費用の高さがもたらす民間乳業会社との牛乳買い付け競争の不在である。しかし、牛乳家内加工は経済自由化という短期的な変化によって誘発された観光客需要に依存しており、この需要は今後も拡大・持続するとはかぎらない。牛乳家内加工への接続という農村内前方連関のあり方の将来は、生乳中心の消費性向をもったアフリカ人都市生活者の嗜好の変化に期待しなければならない部分が大きいであろう。だが、乳製品需要が順調に拡大したとしても、現在の零細な乳牛飼養規模のもとでは、域内において原料乳の不足に直面するであろう。山腹上部の地域においては、飼葉の輸送費用を上回る収益が期待されなにかぎり、この活動が広範に展開していくとは考えにくい。雇用創出能力についても、多くを期待することは難しい。

ところで、牛乳家内加工の担い手は、すでに明らかにした主要な取引回路に依存した牛乳生産・販売世帯とは大きく異なる特徴をもっていた。第1に、加工の主体は同じく女性だが、彼女らは原料乳を、男性集出荷者からの大量買い付けか、女性生産者からの現金介在取引によって調達している。とくに、後者は牛乳をめぐる既存の取引回路③、④の外部に新たに形成されてきた反復性のある大量取引である。第2に、牛乳家内加工を恒常的に行っている2世帯は、夫・妻とも公共部門での農外就労歴があり、このことがこの農村零細企業活動を始めるのに必要な資金と知識の蓄積に大きく関わっていることがうかがえた。第3に、牛乳家内加工は、メル人小農世帯における従来の性的役割分担に根本的な修正を加えたうで成り立っていると考えられる。すなわち、程度の差こそあれ妻独自の管轄下におかれてきた牛乳をめぐる、

夫が投資をしているのである。第4に、恒常的加工者は、取引回路①、②よりも、飼葉の集落間調達、とくに低地からの調達に多くを依存しつつ、乳牛の自家飼養頭数を増加させて家内加工を維持しようとしている。その際に親族ネットワークは利用されておらず、また夫が大きな役割を果たしていることがわかった。そして、第5に、この企業活動において動く現金、得られる純益は、通常の牛乳生産・販売世帯を凌駕する規模に達している。これは、農村貧困層が自給を維持するために従事していると受け取られがちな、通常の「農村インフォーマル・セクター」活動とは異質である。

このようにして、妻が、従来の自給補完的取引の枠外で、他の経済活動を通して蓄積した資金・知識に支えられ、既存の性的役割分担を部分的に改変し、域外からも物資を調達して規模の拡大を志向しながら、自給水準を超えて生産するというのが、メル山斜面地域において現れ、活動を軌道にのせた牛乳家内加工のもつ特徴である。これらの条件・特徴を備えた人々が、経済自由化がもたらした機会に先陣を切って対応することが可能であったということができよう。同時に、その場合においても、女性に牛乳の処分を任せてきたメル人農村社会における性的役割分担の構造を引き継ぐ形で、牛乳加工も女性による活動とされ、それが彼女らによって担われていることも興味深い。しかし、仮に今後、観光客需要だけでなくアフリカ人の乳製品需要が増大したとしても、他の女性たちの多くが以上のような特徴のいくつかを備えるようになり、この活動を本格的に展開していく主体となるかどうかについては、議論の余地がある。

自給水準を超える加工販売を維持するためには一定の資金蓄積が必要であるとすれば、加工販売の立ち上げは農外就労などを通して形成されてきた経済的階層化を前提とすることにもなり、かつこの活動はその階層分化をいっそう推し進めることにつながりうる。こう考えると、多くの女性が牛乳家内加工を恒常化させていくことは想像しがたい。資金や技術の欠如を、たとえば女性グループを組織して克服することも考えうるが、これは対象地域においてはまだ大きな広がりをもせていない。個別世帯が乳製品を不定期に、ま

たごく零細に生産する程度では販路も不安定なままにとどまり、家内加工は女性による自給維持をめざした生計多角化の一戦略にもなりえないかもしれない。また、牛乳家内加工が農村における女性同士の親族選択的で自給補完的な相互扶助の取引からの逸脱や、世帯内での女性の役割分担における変化を前提とするものであるとすれば、さらには牛乳家内加工の主体として男性が前面に出ることがありうるとすれば、そうした変化をもたらす条件も満たされなければならない。本章で見いだした事例のように、夫妻ともに農外就労経歴をもつことはそうした役割変化の必要十分条件なのかもしれないが、何が世帯内の性的役割分担を変化させ、家族経営の農村零細企業を生み出す条件を整えるのかという問題、また世帯内での性的役割分担が農村における新たな零細企業活動の形成にとって障害となるのかどうかという問題をめぐっては、牛乳家内加工に限らずさらに研究を深めていく必要がある。生産を恒常化させている牛乳家内加工世帯は、親族ネットワークにほとんど依存していなかった。農村家内加工のような対象については、親族ネットワークの検討に並行して、世帯内の性的役割分担の構造とその変化についても、研究を積み重ねていくべきであろう。

〔付記〕 本研究は、文部省科学研究費補助金国際学術研究「アフリカ小農および農村社会の脆弱性増大に関する研究」（研究代表者：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・島田周平教授）、および「アフリカの農村貧困問題に関する社会経済史的研究」（研究代表者：京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・池野旬助教授）の研究分担者として、1999年および2000年に実施した現地調査に基づいている。

〔注〕 _____

- (1) メル山斜面に入植したもう一つの主要民族集団は、アルーシャ人である。彼らは牛牧民マサイ（Maasai）から分かれてメル山斜面に定着した農耕民であり、19世紀前半に現在のアルーシャ市より西の南西麓に入植した（Spear [1996] [1997]）。メル人の生活圏は同市より東に展開しており、アルーシャ人のそれとは大部分重なっていない。

- (2) この種の混作屋敷地は、チャガ語ではキハンバ (kihamba) と呼ばれているが (Ikegami [1994]), これに相当するメル語は見いだせない。混作屋敷地はメル語でンレマ (nrema) と呼ばれるが、これは耕地を意味する言葉であり、季節作物耕地もこれによって表現されている。混作屋敷地での中心的な作物はバナナとコーヒーだが、その間に季節作物が植え付けられている場合もみられる。
- (3) なお、ソングロ村に隣接する政府植林地帯においては樹間耕作が行われている。苗木が植え付けられた後の7年程度の期間、森林官 (bwana miti) は生育途上の木々の間でメイズ、マメ類、ジャガイモなどの栽培を行うことを認めており、ここにはムベヤ (Mbeya) 州出身のサファ (Safwa) 人が集中している。地代は支払われておらず、代わりに借り手は植林地帯内の道路補修などの労働奉仕をすることが期待されている。彼らから食糧や家畜飼料を購入するメル人は少なくない。
- (4) インコアサクヤ村区では、小地片を売却して他所により大きな耕地を購入して転出する事例が多い。売却は親族の間においても行われており、土地所有の個別化が進んでいる。しかし、土地取引においてはクランによる一定の規制がみられる (上田[2000: 86-87], Ueda [2000: 12-13])。
- (5) 婚姻に際して、メル人男性の氏名の構造は「自分の名+父の名+父のクランの名」のまま変化しないのに対して、女性の氏名は「自分の名+夫の名+夫のクランの名」に変更される。これは、国政選挙における選挙人登録などの際に用いられている氏名表記である。女性が子どもをもうけた後に離婚した場合には旧姓に戻ることは不可能であり、再婚しないかぎり前夫の痕跡は女性の氏名から取り除かれずと説明する男性もいる。女性は、婚姻を通して夫のクラン、ないしリネージの一員となった結果、夫のリネージ成員に対して各種の義務を果たすことを期待されるようになる。なお、メル人のジェンダーをめぐる問題についての研究としてはHaram [1999]があるが、脱稿時点で未見である。
- (6) メル人の人口移動においては、移動元と移動先とがかなりの程度一対一に対応しており、これによって形成されるネットワークは、山腹の一点から山麓・低地へ向けて多方面に拡散していくというよりも、一点から延びる限られた数の太いパイプのような形を示していると考えられる。上田[2000: 91-94], Ueda [2000: 15-19]では、この傾向を低地村の側からも確認した。
- (7) かつて、他世帯の耕地での刈跡放牧を願い出たときにも、牛乳による返礼がなされたという。
- (8) 乳牛の繁殖に際しては、近隣の親族・知人の雄ウシに頼ることが多く、1回の種付けにつき2000タンザニア・シリング程度が支払われている。この金額は人工受精に要する費用と同程度だが、人工受精を行った経験のある世帯はインコアサクヤ村区の30世帯中2世帯しかなかった。人々は、これを山麓に設けられて

いる人工受精施設までの距離と標高差のためであると説明している。人工受精は、自然受精をとりもってきた集落内外の社会的ネットワークを迂回する、より普遍的な制度だが、これは現在のところ同村区には浸透していない。なお、2000年8月現在、1タンザニア・シリングは約0.14円であった。

- (9) ある回答者が取引相手として回答した人物が他の調査対象世帯のどれかの構成員であり、かつその人物もこの回答者を取引相手として特定した場合は5例あり、それらはいずれも無償贈与・無償受領の取引であった。しかし、双方の回答が同一時点の同じ取引を指しているかどうかを確定することができないので、ここでは一方を重複分として差し引くことなく集計した。他の取引形態においては、取引事例の重複は確認されなかった。
- (10) 飼葉にはすでに触れたようにいくつかの種類がある。ここでは、株数あるいは束数のみで勘定されるバナナ茎葉と、面積を含む複数の単位が並行して用いられる他の飼葉とに分けて、取引数量を把握する。バナナ茎葉以外の飼葉の取引数量は、面積、積載トレーラー数、束数、テラス縁本数（段々畑の境界に植栽された飼料作物の計量単位）といった単位で回答された。同一年の取引価格情報をもとにして、これらの異なる数量をすべて面積に換算した。このようにして各取引の数量を求め、1件当たりの平均取引数量を算出した。
- (11) 認定された取引回路において現金介在性や親族選択性の有無を分ける理由を明らかにすることは重要だが、個々の取引における行為者の意図を問わない集計レベルの分析によっては、そうした理由を詳しく吟味することはできない。また、これは牛乳家内加工との接合状態を明らかにしようとする本章の主目的でもない。だが、飼葉と牛乳をめぐる取引回路①～④については、「小規模で自給補完的な現金不在取引の場合は取引相手の決定において親族選択的でも非親族選択的でもありうるのに対して、相対的に大規模な現金介在取引の場合は取引リスク回避のために取引相手の決定に際して非親族選択的となる」という仮説によって、取引の傾向性・反復性の意味を一律に解釈することが可能ではないだろうか。もちろん、これは本章で提示したデータによって実証されたわけではなく、一つの解釈である。
- (12) しかし、山麓と低地の間には集落間にまたがる受委託関係が皆無なわけではない（上田[2000: 102-107], Ueda [2000: 24-28]）。
- (13) 乳質は乳牛の種類によっても変化する。アケリ村など山麓地域では、ジャージー種と在来種の交配種が多いのに対して、ソングロ村を含む斜面上部の地域ではエアシャー種やフリージアン（ホルスタイン）種の純血種が多いといわれている。
- (14) 牛乳輸送先としては、他にもたとえば低地のタンザナイト採掘現場がある。そこで働く人々に対して、牛乳はアルーシャ市街よりも若干高めの販売価格で供給されているという。

- (15) 1 番目の世帯については、1998/99年シーズンに協同組合に対して60キログラムの加工前コーヒー果実を販売して1万5600シリングを、そして民間買い付け企業に対して同じく未加工品103キログラムを販売して2万3175シリングを得ており、売上合計は3万8775シリングであった。また2番目の世帯は、同シーズンに民間買い付け企業に対して150キログラムの加工済みパーチメント・コーヒーを販売して22万5000シリングを得ている。なお、メル山斜面地域における小農コーヒー生産・加工技術については、上田[1998]を参照されたい。
- (16) ただし、山麓に青空飼葉市場が立つ場合がある。よく知られているのはアルーシャ市に向かう街道沿いの交易センターであるウサ・リバー (Usa River) のそれであり、そこでは青年が周辺のコーヒー大農園、公有地、未利用地の自然植生を刈り取って山積みにし、顧客待ちをしている。
- (17) 種類は不明だが、ダルエスサラーム大学のスタッフから購入した種菌を、低地から搬入した稲わらを煮て作った培地に植え付けてビニール袋に包み、これを保湿した小屋内で栽培している。観光ホテルなどとの交渉次第で、1キログラムが3500から5000シリングで売却される。売上高は、1年間で80万シリングに達したということである。これも、通常のコーヒー販売収入を大幅に上回るものと考えてよい。
- (18) 世帯Eについては、チーズ製造を行う妻本人がモロゴロ (Morogoro) 州で開かれていた農業関連の催しに出張中で不在であり、製造の詳細、グループ構成員による他の活動との採算上の関係については不明である。だが、行政をいわば利用しながら外国人観光客を招き入れていることを、他の加工世帯とは異なる点として指摘できる。山麓の幹線道路から最上部集落の一つムララまで登る道の入り口には、ムララ文化観光プログラム (Mulala Cultural Tourism Programme) という看板が出ており、観光客は、これを目指して登っていくと、世帯Eのチーズ工房に達する。観光客はそこで現地の人々に接し、チーズ製造の説明を受け、訪問者録に氏名を記した後、アルメル県に対して開発税を納入する仕組みになっている。すでに触れた世帯B、C、Dは、このようなプログラムとは無関係である。

〔参考文献〕

〈日本語文献〉

- 池野旬[1998]「タンザニアの農村インフォーマル・セクター—国民経済の新たな担い手を求めて—」(池野旬・武内進一編『アフリカのインフォーマル・セクター再考』アジア経済研究所) pp. 145-176。
- [1999]「タンザニア、北パレ平地村の水利組織—東アフリカにおける農村共同

体をめぐる一試論—」(池野旬編『アフリカ農村像の再検討』アジア経済研究所) pp. 59-115。

上田元[1997]「ケニアにおける零細企業群再生産の理論と歴史」(『アジア経済』第38巻第11号, 11月) pp. 50-67。

—[1998]「小農のコーヒー生産・加工技術—タンザニア北東部高地の事例から—」(原隆一編『風土・技術・文化—アジア諸民族の具体相を求めて—』<21世紀の民族と国家 第6巻> 未来社) pp. 241-283。

—[2000]「タンザニア・メル山斜面における人口移動と生業の集落間連関—社会的ネットワークと生業をめぐる試論—」(高根務編『現代アフリカにおける国家, 市場, 農村社会』アジア経済研究所) pp. 71-116。

〈外国語文献〉

Haram, Liv [1999] *Women out of Sight: Modern Women in Gendered Worlds: The Case of the Meru of Northern Tanzania*, Thesis submitted in partial fulfilment of the requirements for the degree of Doctorem Rerum Politicarum, Department of Social Anthropology, University of Bergen.

Hyden, Goran [1987] “Capital Accumulation, Resource Distribution, and Governance in Kenya: The Role of the Economy of Affection,” in M.G. Schatzberg ed., *The Political Economy of Kenya*, New York: Praeger, pp. 117-136.

Ikegami, Koichi [1994] “The Traditional Agrosilvipastoral Complex System in the Kilimanjaro Region, and Its Implications for the Japanese-Assisted Lower Moshi Irrigation Project,” *African Study Monographs*, 15(4), pp. 189-209.

Lane, Charles [1996] *Pastures Lost: Barabaig Economy, Resource Tenure, and the Alienation of their Land in Tanzania*, Nairobi: Initiatives Publishers.

Maroroni, Kijiji cha [1997] *Taarifa ya Kijiji cha Maroroni Kuanzia Mwaka 1951 hadi 1997*.

Spear, Thomas [1996] “Struggles for the Land: The Political and Moral Economies of Land on Mount Meru,” in G. Maddox, J.L. Giblin and I. N. Kimambo eds., *Custodians of the Land: Ecology and Culture in the History of Tanzania*, Oxford: James Currey, pp. 213-240.

—[1997] *Mountain Farmers: Moral Economies of Land and Agricultural Development in Arusha and Meru*, Oxford: James Currey.

Tanzania, the United Republic of [1998] “Arusha Region Socio-Economic Profile,” Arusha: Regional Commissioner's Office and Dar es Salaam: The Planning Commission.

- [2000a] *Market Review of Dairy 1998/99*, Dar es Salaam: Agricultural Information and Services Section (AIS), Department of Policy and Planning, Ministry of Agriculture and Co-operatives.
- [2000b] *Hali ya Uchumi wa Taifa katika Mwaka 1999*, Dar es Salaam: The Planning Commission.
- MOAC, SUA and ILRI [1998] *The Tanzanian Dairy Sub-Sector: A Rapid Appraisal Vol. 3- Main Report*, Collaborative Report by Ministry of Agriculture and Co-operatives (MOAC), Dar es Salaam, Sokoine University of Agriculture (SUA), Morogoro, and International Livestock Research Institute (ILRI), Nairobi, Kenya. Funded by Swiss Agency for Development and Co-operation, Switzerland.
- Ueda, Gen [2000] "Migration and Inter-Village Relationships around Mount Meru, Tanzania: An Essay on Social Networks and the Livelihood in the Sedentary Rural Society," *Science Reports of Tohoku University, 7th Series (Geography)*, 50-1, pp. 1-33.
- Wangwe, S.M., H.H. Semboja and D. Tibandebage eds. [1998] *Transitional Economic Policy and Policy Options in Tanzania*, Dar es Salaam: Mkuki na Nyota Publishers.